

歯学部ニュース

平成21年度 第1号

通算115号



特集



歯学部学生の今！



歯学部のクラブ活動紹介



香港大学歯学部訪問

目 次

特集1 歯学部学生の今！	1
臨床実習を経験して 北崎 浩一・立花 美和・岩村 千尋	
5年生だより 富樫祐介	
4年生だより 中島 努	
3年生だより 相原のぞみ・竹村遥奈	
2年生だより 遠間愛子	
入学者のことば	11
歯学科	
口腔生命福祉学科	
大学院生 高辻 華子・山中 裕介	
入学を祝して	15
学部長	
副病院長	
入学おめでとう！	18
平成21年度歯学部入学者名簿	
新入生合宿研修を終えて	20
画像診断・診療室 田中 礼	
特集2 歯学部のクラブ活動紹介	24
文化部の逆襲!? 林 孝文	
軽音楽部 (LIARS) ってどんなイメージ? 4年 小林 太一	
茶道部って楽しいの? 4年 上村藍太郎	
特集3 香港大学歯学部訪問	30
魚島 勝美・長澤麻沙子・塩生 有希・南 智香子	
連載：「大学院に行こう」	37
原田 史子・中川 英蔵	
Otago 大学 Research day に参加して	40
大学院2年 青木由香莉	
留学報告	42
Kenji Izumi	
歯学部運動会を終えて	45
5年 細川 翔太	
国家試験合格おめでとう！	46
第102回歯科医師国家試験合格者	
第18回歯科衛生士試験合格者	
第21回社会福祉士国家試験合格者	
教授に就任して	47
歯科総合診療部 藤井 規孝	
口腔生理学分野 山村 健介	
診療室・講座紹介「新名称の補綴科の将来展望」	53
包括歯科補綴学 (野村 修一)	
生体歯科補綴学 (魚島 勝美)	
看護部だより	60
右近さゆり	
素顔拝見	63
石崎 裕子・田中 裕・丸山 智・昆 はるか・小島 拓	
学会報告	69
同窓会だより	70
歯学部各種委員会	77
教職員異動	80
編集後記	84

臨床実習を経験して

歯学科6年 北 崎 浩 一

どうも、北崎と申します。自分のクラスは41人中男子が15人という画期的なクラスで、そのおかげか他学年にはないまとまり感と、助け合いの精神が根付いた俗に言う、ブレないクラスです。そしてみんなと経験した臨床実習は、1年が本当に早かったという印象です。

臨床実習にあたっては、患者様にご迷惑をかけないよう真剣に予習をし、頭の中でイメージしてから診療に臨むのですが、それでも緊張や焦りで戸惑うことも沢山ありました。そのような時もライターの先生にアドバイスしていただき、大変勉強になりました。その場その場で頭を働かせて判断し、臨機応変に対応していく力を身につければと感じました。実習の中で、根治やクラブリなどの補綴において、2症例目に入ると狭い口腔内ながら少し視野が広がり、頭の中でマニュアル以外の部分、つまり前回、先生に教えられたことや、自分で感じたことをフィードバックしながら、自分の力でより良い診療になるためにはどうした

らいいか、を考えることが重要だな、と感じました。

自分の診療では、根治が終わり、残存歯質があまりなかった歯にコアが入り、最終補綴物が入るという経過が非常にやりがいを感じました。見た目の問題だけではなく、機能の回復という点で患者様に携われたことが非常に有意義でしたし、患者様が満足された様子を拝見して、「ありがとう」といわれた時の達成感は何事にも変え難いものだと感じました。

最後に、学生が自主性を持って、実際の治療ができるという貴重な機会を与えてくださる患者様たち、諸先生方に感謝するとともに、この気持ちをこれからもずっと忘れずに成長していかなくてはと感じています。これまで学んできた知識や技術をしっかり身につけ、今後さらに多くの患者様に本当の意味で「ありがとう」と言われるような歯科医師になれるよう研鑽していきたいと思えます。



総合診療室を経験して

歯学科6年 立花美和

昨年の10月から総診での臨床実習が始まり、この原稿を書いているのは7月下旬。あと1週間で、学生生活最後の夏休みです。振り返ると、始まってから今まで、あっと言う間の9ヶ月でした。一言で感想を言うのなら、『とっても大変だったけど……楽しかった!』

今までの模型相手の実習とは違い、臨床実習では手順の一つ一つが重要で、責任が伴ってきます。失敗したらどうしようという不安や緊張から、はじめの頃は、ミラーを持つ手一つですら震えました。ポリクリやオスキーであれほど練習したはずの実技は、実際に患者様を目の前にしてみると、全く思い通りにいかないのです。そんな未熟な私に対して、患者様は「頑張って」「最初からできる人なんていないよ」と、笑顔で声をかけてくださいました。その一言で、どれだけ救われたことでしょうか。自分の至らない点を反省すると同時に、もっと経験を積んで、患者様に喜ばれるような診療を行いたいと思うようになりました。

5年生までで一通りの勉強は終わっているとは

いえ、実際に臨床を経験してみると、分からないことだらけです。患者様の口腔内の状況も千差万別で、教科書通りにはいきません。原因は？ 治療の優先順位は？ 悩めば悩むほど、新たな問題が出てきます。そんな時に、アドバイスをくださる先生方や、一緒に知恵を持ち寄って考えてくれる同級生達の存在は本当に心強かったです。

技術や知識の少なさから失敗することも多く、反省しきりの毎日でしたが、同時に吸収することも多かったです。今まで平面的に学んできた知識が、どんどん形を成して立体的になっていくような、わくわくした感覚を味わうことができました。

患者様は勿論のこと、本当に多くの人に支えられてきた実習だったと思います。

この場を借りて、お世話になった全ての方々へ心よりお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。皆様のご厚意に報いることのできるよう、頼りがいのある歯科医師を目指して、努力していきたいと思います。

臨床実習を経験して

歯学科6年 岩村千尋

入学した頃は、「6年間か……長いな」と思っていました。気付くとあっという間に6年間が過ぎようとしています。1年の頃、早期臨床実習の患者役実習で6年生に診ていただいたとき、6年生ってカッコいいな、私もこんな6年生になれたらいいなあと思っていました。つい先日、その早期臨床実習の術者役（私があこがれていた6年生役）が終わり、自分の憧れの6年生に近づくことができたと問われると即答できませんが、1年生が5年後、自分もこんな実習をするのかと、イメージするのにお役に立てたのではないかと思います。

この“早期”ではない臨床実習についてですが、学生が指導医のもと患者様の治療をさせていただけるという、すばらしい実習です。このような実習を学生のうちからさせていただける大学は全国でも数少ないということで、本当にありがたいなと常々感じております。そのような、臨床に触れさせていただけるまたとないチャンスを無駄にしないよう、しっかりと予習をして当日に臨むわけですが、当然、知識を詰め込むだけでは実際の臨床ではなかなかうまく“手”が動きません。この

ため、私は今まで何度も患者様と先生、友人たちにご迷惑をおかけしました。操作に時間がかかりすぎて患者様を疲れさせてしまう、しっかりと予習したはずなのに結局先生の力をお借りして一瞬で終わってしまう、次の患者様の約束時間まで時間がなく、片づけを友達に手伝ってもらう……など、今考えると自分は本当に皆様のご協力のおかげで生きていられるのだなと感じます。

このように、臨床実習を残りとわずかに控えた6年生とは思えないほどの成長のなさで、なんだか書いてると悲しくなってきましたが、私は6年間で今の臨床実習が一番充実していて楽しいです。技工やレポートに追われ、つらい事もありますが、いつも友達に励まされ、またやる気もらっています。みんな本当にありがとう。

最後になりましたが、いつもキャンセルせずに通ってくださる患者様方と、いつもお世話になっている先生方に感謝いたします。これからもよろしく願いいたします。そしてクラスの皆さん、いつもどうもありがとう。学生生活も残りわずかですが、卒後もぜひよろしくお願い致します。



5年生だより

歯学科5年 富 樫 祐 介

こんにちは。5年バド部の富樫祐介です。
あみだくじです。

うちのクラスには私より真面目で、原稿を書くに相応しい人材が溢れていると思うのですが……。後輩の方々にとってどれだけ役に立つかわかりませんが、とりあえず、テーマが「去年を振り返って今年について」ということなので去年を振り返りつつ書いていこうと思います。

4年での講義は、座学では臨床専門科目がメインで、他に隣接医学などを学んでいきます。臨床専門科目は、実際の臨床の現場に出ている先生方の講義なので、本や医学雑誌からでは得られない話なども聞けるチャンスです。まだ臨床の現場に立ったことのない未熟な私が言うのも変なのですが、本や医学雑誌で得られる二次的情報よりも、実際に耳にする、直接人から聞ける一次的情報の方が、将来きっと役に立ち、実用的な情報になるように思います(教科書から学ぶことも、もちろんたくさんありますが)。

隣接医学は、どうせ歯科と関係の薄い勉強なんだろうな、なんて思っていたのですが、実際に講義を受けてみると面白くわかりやすく教えてくださる先生もいらっしゃり、興味を持って講義を受けることができました。5年のPBLなどでも役立つこともあるので、是非興味を持って臨みましょう。

実習は、歯冠修復学、欠損補綴学(FD、PD)、歯周病学、予防歯科学、歯科矯正学、歯周病学と盛りだくさんなカリキュラムとなっています。個人的感想ですが、実習は楽しかったです。楽しいという表現が正しいのかわかりませんが、練習して上手くいった時や、どのようにしたら上手くいくのか、もっと効率のよい方法はないのか、上手

い人はどのようにやっているのか、などと考えたりすることが楽しく感じられました。

5年前期での講義のメインはPBL、総合模型実習、統合科目、ポリクリです。

PBLは、実社会におけるケースを学習のきっかけとして、そこに潜む問題を拾い出し、少人数での討論により問題を解決する、といったものです。

総合模型実習は、5年後期から始まる臨床実習において求められる統合的な知識、技術を身につけたり、実際の患者様の診療計画の立案も含めた臨床を模擬的に訓練することが目的とされています。4年の時の実習と違って、患者様あつての診療計画であつたり治療であつたりするので、患者様にとって何が最善の診療計画なのか、治療なのかを考えることが難しく、とても大切なことなんだなと実感する実習です。実際、臨床の現場に出たら沢山悩む機会があると思いますが、きちんと問題に向き合って解決していき、患者様に貢献できる、喜んで頂ける歯科治療を行っていただきたいと思います。

沢山のものを見たい。沢山の写真を撮りたい。いろんなものを食べたい。いろんなお酒を飲みたい。沢山話したい。いろんな話聞きたい。色んな場所に行ってみたい。もう無理ってくらい走りたい。脱水なるくらい汗かきたい。腕があがらないくらい羽根打ちたい。息できないくらい泣いてみたい。腹がつるくらい笑いあいたい。大学で知り合った仲間とまだまだやり残していることが沢山ある気がします。

長いと思っていた大学生活6年間ですが、振り返ってみると本当にあっという間ですね。

残り短い大学生活ですが、支えてくれている人

に感謝し、人として、医療人として成長できるよ 大学生生活を共に謳歌しましょう。
うに日々生活していきたいと思います。みなさん、



4年生だより

～四年生になって～

歯学科4年 中 島 努

四年生になってから変わったことがたくさんあります。正確に言えば三年生の後期からになるのだが、ついに専門科目として歯のことについての詳しい学習が始まりました。

今までを振り返ると、一年生は教養科目、二、三年生は基礎科目とここに来るまで、ほとんど歯学部なのに歯学部らしい勉強をすることがなかったのですが、四年生になりほとんどが歯に関する勉強となり、いよいよ自分たちが将来なる歯科医師としての道を歩み始めたことが実感できるようになりました。そう思えるようになって初めて、「学ぶこと」に対するモチベーションが生まれ始めました。

この四年生という学年は歯に関することで1日が始まり、歯に関することで1日が終わっていくような気がします。座学では常に新しいことや、今まで学んできた基礎科目がここにきて歯科とつながり始め、毎日興味を持って聞くことができます。講義の内容も違う科目でも歯科領域であるためどの範囲でもカバーしている領域も多くあり、二、三年生とくらべ、テストは格段に楽になったように感じます。また実習ではインレー、クラウン、全部床義歯といろいろな技工物の制作が始まりました。これらを作ることは本当に難しいことばかりで、自分の未熟さを思い知らされますが、こうやって作っていたのか、こうするとうまくいくのかなど、新しい発見ができたりと楽しいことばかりです。一から自分で作ったものには愛着も生まれて完成に近づくにつれ、どうなるんだろうとわくわくすることもできます。今は技工操作が

メインですが、臨床の擬似体験もでき本当に参考になります。ただ、このように技工操作など臨床に近づくにつれ患者様を意識することが多くなりました。ひとつひとつの操作にもやはり時間がかかり、さらにその操作が本当にうまくいっているのか？自分が満足するものは時間をかけて作れても、患者様が満足するものを作れるのだろうか？ととても不安な気持ちになりますが、それと同時にそのためにも頑張ろうという気持ちが実習を通して強く現れるようになりました。

さらにこの他にも四年生はほとんどの部活で幹部学年となる学年でもあります。個人的なことを言うと私は硬式庭球部で主務という仕事をしていました。

この仕事ではほとんどがOBの先生方に部活の連絡となる手紙を送ったりと、地味で作業量も多い仕事でした。失敗もしてしまいましたが、こういった仕事を行ったことで、将来歯科医となった時に治療以外の庶務で活かせることができると思います。大変でしたが、良い経験ができたと思います。またこの他にも、部活では今年初めてデンタルにレギュラーとしてデンタルにも出ることができて本当に充実した部活動を送ることができました。

このように四年生は本当にこれまでの学生生活と一変して、より歯科医としての道に踏み込んでいく気がします。大変なことも多いですがそれ以上に楽しいことが多くより充実した日々をおくれる学年だと思っています。

3年生だより

～歯学部43期生の様子をまとめます…～

歯学科3年 相原 のぞみ
竹村 遥奈

今回、わたしたちがどのような学生生活を送っているかについて、わかりやすくまとめるようにと指示がありましたので、いくつかご紹介申し上げます。43期生は現在3年生です。この原稿を書いているのは8月15日の午後ですが、みな、思い思いに人生の夏休みを過ごしていることでしょう。

●お勉強に関して

〈2年生後期を思い出します…〉

2年生の後期は、講義が少ないのが特徴です。アルバイトに励む人が多かったように思います。男の子たちは、夜な夜な集ってはトランプやジェンガなどの室内遊戯をして時間を潰したことでしょう。また、冬休みは成人式を迎える人が多く、さっさと帰省してしまいます。

この時期、毎週金曜日の午後は五十嵐キャンパスで物理実験を行います。物理実験は、毎回実験内容と共同実験者が任意で決められており、ふだんコミュニケーションを欠いている学友と交友を深める良い契機となります。私たち43期生はこのような機会を経て大変仲の良いクラスを築くことに凶らずも成功しています。

〈3年生前期を振り返ります…〉

3年生の前期は、解剖実習の記憶によって塗りつぶされます。この実習は時間的拘束が長いため、学友同士は文字通り寝食を共にしました。ある時は解剖実習室を23時に退出し、翌日8時に再びみなさんにお会いしては「9時間ぶりww元気だった？」などと励ましあいました。学友同士はこの実習を通して、命の尊さと使命感を得る大変貴重な時間を過ごし、同時に相互に助けあう精神を学びました。解剖実習が一週間に3回あるという時間割は、2009年度限定のものでしたので、ご心配なく。



向かって(右)相原、(左)竹村

●行事に関して

〈運動会〉

運動会は、わたしたちのような大学生が日ごろの運動不足を解消すべく、いつも以上の実力を発揮して、体力を消耗しきる行事です。43期生は、運動会を最大限に楽しみましたが、同時に負傷者(骨折2名など)も続出し、複雑な心境で運動会を終えました。が、名誉の負傷ということでクラスの絆もより深まったに違いありません。

〈オールデンタル〉

オールデンタルは全国歯学生総合体育大会の通称で、運動系の部活動に所属する学生にとっては一大イベントです。毎年、全国の歯学生が開催地に集い、スポーツマンシップに則りつつも、他大学との交流を深めるという、社交的な場となりま



す。2009年は埼玉県や他の近県で行われましたが、2010年は西日本で行われる予定です。

●その他語りたいポイント

〈43期生の仲の良さ〉

わたしたち43期生は大変仲の良いクラスです。どういう縁があって、現在のメンバーがそろったのかわかりませんが、何かのイベントや団結力を見せつけなければならないような状況では、個人の強すぎる個性が突出しつつも、なんとなくまとまることができます。クラス幹事のGくんが、無理やりクラスをまとめていますが、みなそれに素直に従っています。

〈新潟の冬に鍋の会〉

新潟の冬は風が強く、湿った雪がまとわりついて大変不快です。こんな季節、どうしても外に出るのが億劫になりがちですが、わたしたちは学友同士で材料を持ち寄り、鍋をします。みな、自分のお椀と箸を持参します。こうして、外食にたよってばかりの食生活を見直したり、食費の節約を図ったりしています。ときどき、実家から送られてきたみかんを持ってきてくれる学友もいて、こたつに入っています。

〈浜コン〉

浜コンとは「浜辺コンパ」の略ですが、近所の海水浴場でバーベキューをしたり、花火をしたりして学生生活を謳歌します。こういうイベントの手配は、すべてGくんが滞りなく行ってくれます。2009年の浜コンでは、鹿児島県出身のOくん



が実家から届いた黒豚を振る舞ってくれ、みなで本当においしくいただきました。ありがとうございました。

最初は、「海に入る気はないな〜」なんて言っているみなさんも、次第に童心に帰り、最終的にはみんなで手をつないで後期の抱負を叫びつつ海に飛び込みました。

少しはわたしたちの生活の様子を理解していただけたでしょうか。4年制の大学に通っている学生の様子とは、また違うのかもしれませんが、もしかしたら、わたしたちのようにクラス単位で講義を受けたり、活動したりするケースは稀なのかもしれません。いずれにせよ、わたしたちは元気で充実した生活を送っています。お勉強に頭がついていかない日もありますが、学友同士支えあう体制もできています。残り半分の大学生活をわたしたちの人生の糧とすべく、日々精進して参る所存です。



2年生だより

歯学科2年 遠間 愛子

昨年を振り返ってみると、比較的自由な時間がたくさんあったのでいろいろなことに挑戦でき、充実した一年間でした。

まず、一年生の前期で特に印象的だった早期臨床実習Ⅰについて書きたいと思います。早期臨床実習Ⅰでは、グループに分かれて患者役実習、治療見学、付き添い実習を行いました。初めは白衣を着て病院に出ることとにかく緊張した覚えがあります。また、入学したばかりで歯科医療について全く知識がない状態だったので、体験することすべてが新鮮でした。特に患者役実習では六年生のご指導のもと、ペアの人とお互いにバキュームをしたり、印象をとったりして実践的なことを体験できました。また、付き添い実習では最初は患者様とどのように接したら良いかわからず戸惑うばかりだったのですが、回数を重ねることに慣れて、患者様から多くのことを学ばせていただきました。白衣を着ていると、例え学生であっても診療科の場所や歯学について聞かれたので、患者様からは自分も病院のスタッフの一員だと思われるんだという自覚が芽生えました。早期臨床実習Ⅰは一年生では唯一の専門科目でしたが、モチベーションが高まり二年生の専門科目が楽しみになるきっかけになりました。

ここで部活について書きたいと思います。私はバドミントン部に所属しています。私は高校時代もバドミントン部に入っていましたが、正直こんなに長くバドミントンを続けるとは思っていませんでした。入ってみると、優しい先輩方ばかりで和気あいあいとした感じでとても楽しいです。部活に入っていなかったら大学生活はこんなに楽しくなかったと思います。部活のことだけではなく勉強についても先輩方にとってもお世話になってい

ます。来年のデンタルで代替わりだと思うととても早いです。先輩方の結束力の高さを見習ってこれから後輩を引っ張っていけたらなあと思います。

これは歯学部とあまり関係のないことなのですが、私はダブルホームに所属しています。ダブルホームとは、文系・理系・医歯系の学生が学部を越えて集まり、グループつまりホームを作ってそれぞれの研究プロジェクトについて活動を行う取り組みです。私たちのホームは新潟県の東蒲原郡にある阿賀町に定期的に訪問し、地域の皆さんと交流などを行っています。ダブルホームにはもともと参加しようと思っていたわけではなく、たまたまじゃんけんで決まったことが入るきっかけだったのですが、今では本当に参加してよかったと思います。歯学部にいるとなかなか全学の学生や先生方と交流する機会がないので、ダブルホームを通じて本当に貴重な体験をさせていただいていると思います。活動拠点が主に五十嵐キャンパスなので今年度はなかなか参加できずにいるのですが、できる限り続けていきたいです。

二年生になってみると、まず一年の時とのギャップに驚きました。特にびっしり時間割が埋まっていてほぼ毎回同じ教室で講義が行われることです。なんだか大学って感じがしないなあと思いましたが、今では座る位置も指定席のように決まり、仲間がいてアットホームな雰囲気です。専門科目は学ぶ量がとても多く試験前は毎回苦戦しています。しかし自分の興味のあることなので勉強していておもしろいです。これから夏休み後に山場が来るので頑張って無事に乗り越えたいと思います。

こうして改めて自分の大学生生活を振り返ってみると、一年間は本当に早いものでした。これからもこの調子で時間が過ぎていくと六年間はあっという間だと思います。だからこそこれからの時間

を大切にひとつでも多くのことを吸収していきたいです。まだ二年生ということもあり時々先が見えなくなることもありますが、一步一步着実に自分自身成長していきたいと思っています。



入学者のことば

新潟大学歯学部に入學して

歯学科1年 北谷 裕之



入学して4ヶ月が経ちました。早いものです。大学ってどんなところだろう？一人暮らしは大丈夫かな？……なんて、初々しいことから書き始めるのが、入学生のことばの冒頭を飾るに

はふさわしいのかもしれませんが。しかしながら、私はすでに大学を一度卒業しています。再受験し、そして今また大学にいるのです。

小さい頃から歯科医師になりたいという夢がありました。しかし、私自身それ相応の努力をできませんでした。そのため、現役の時はずっと引つかかっているものがありました。結局、そんな思いをどこか抱えたまま大学生活を送っていたので、勉学に関しては気が入らない感じでした。それでも、前の大学生活は陰々としたものではなく、すごく楽しいものでした。そのこともここできちんと話しておきたいと思います。その楽しさにどっぷりと浸かっていたので、思い切って途中で方向転換する気になれなかったのも事実です。気づいたら友達は就職活動や進学先決めの真最中。私はというと、1人フラフラしていました。

大学卒業後は就職もせずにアルバイトをしていました。この時期にいろいろと自分自身について考え直すことが出来ました。これでよかったのか？ 本当にやりたいことは？ 自分の夢は？一出た答えとして、小さい頃からの夢をそれまで以上に強く思うようになり、もう一度頑張ってみたいと決心しました。

親には何度目かは分からない一生のお願いということで、もう一回だけチャンスを頂きました。そして、「旧課程とはだいぶ変わったな……」というところから私の再受験は始まりました。

こうして、遠回りをしてきましたがようやく辿り着いた気分です。簡単ではありますが、理解して支えてくれた家族には本当に感謝しています。これからも自分の夢を忘れずに「努力」していきたいと思います。

入学して

歯学科1年 五月女 哲也



大都会であるはずの栃木県から新潟へ来て、万代橋界隈を見て、地元がど田舎であることが発覚し、なんやかんやしているうちに早いものでもう半年が過ぎた。時が経つのがすごく早い。

自分がおじさんになる日もそう遠くない気がして、少しドキドキする。

地元には日光あるし、東照宮には修学旅行生くるし、外人多いし、一応関東だし、と栃木を過大評価していた。修学旅行などで仙台などへ行ったとき、おや？と思うことは度々あったが、新潟で生活するようになりやっとなつづいた。栃木といえば最近し字工事が頑張っているが、あの訛り、つまり栃木弁は「崩壊一型アクセント」と呼ばれるらしい。ちばらぎ県人会で教授が仰っていたが、崩壊というのはちょっとさびしい。「ちばらぎ」という名前も、栃木は「ぎ」だけである。やっぱりちょっとさびしい。なので「とちばらぎ」にすれば、3県の名前がきれいに入っていて素敵であろうと思う。

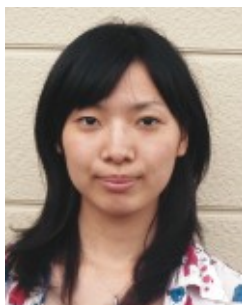
話は変わるが、私は弓道部に所属している。赤

塚での合宿の際、袴がかっこいいというのと、主将がなんとなくとてもいい人を感じたので入部したが、実際に部員となってみると主将はまさしくいい人で、それどころか先輩皆がいい人だった。今年の新入部員は私を含め2人だけだが、先輩方は初心者な我々に一から優しく丁寧に教えてくれた。そのおかげでデビュー戦のデンタルでは的に当てることができた。そして主将は男子個人戦でなんと優勝した。いい人なだけでなくとてもなく弓道がうまい人だった。主将は変わり新主将となった先輩は尊敬している人なので、部活がどんどん楽しくなっていくと思う。まだ弓道を始めて間もないが、奥深さを知り魅力を知った。イベントでは医学部との交流もあり、友人の幅も広がるので来年の新入生には是非弓道部へ入部してほしい。

最後は部活の宣伝になってしまったが、まとめるとこれからも頑張ります!!! ということで

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 佐野仁美



新潟大学に入学して、もう4ヶ月が経ちました。大変だったこともありましたが、かなりあっという間だったように感じます。

私は昔から憧れていた歯科衛生士を目指し、新潟大学に入学しました。生活の中で重要な役割を果たす口腔の状態を整え、人々の健康を支えるという歯科衛生士の仕事の内容に惹かれ、目指すようになりしました。憧れていた大学の学科に入り、夢のような生活が始まる、と思っていました。しかし、大学は私の予想以上に大変なんだということに気が付きました。慣れない課題を出され、大学が嫌になったこともあります。

一般教養の講義や歯学スタディ・スキルズで出されるレポートにはとても苦労しました。高校ではこのような課題は出されないの、どのように

対処すればいいのかわからず、困惑しました。また、私はパソコンがかなり苦手なので、パソコンを使った課題が嫌で仕方ありませんでした。友達に聞いてばかりで、迷惑をかけたと思います。レポートもパソコンも将来的にとっても大切なので、これからもっと努力していきたいです。

早期臨床実習では、自分の体力・精神力の無さを痛感しました。長時間立っているのがとても辛く、早く帰りたいと思ってしまうこともありました。自分はこんなに弱くて将来大丈夫なのだろうか、と不安になることも多々ありました。

そんな私を支えてくれたのは、友達や部活動です。私と同じように歯や福祉に関する職業を目指す友人と一緒に過ごすことで、互いに励まし合い、努力することができました。また、部活では、大好きな運動をしたり、先輩方とお話することがとても楽しくて、私は元気をたくさんもらいました。

これから先、もっと辛いことが待っていると思いますが、自分を支えてくれる人達を大切に、歯科衛生士になるために精一杯努力していきたいです。

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 廣田絢花



高2の夏にこの学科を知って以来、ずっと念願だった新潟大に入学して4ヶ月がたちました。入学当初は、人数が少ない学科だし、とか初めての一人暮らし大丈夫かな、とか不安もたくさん

あったし、部活やサークルもたくさんあるし、履修登録も時間割をどう組んだらいいのだろう、とか高校とは全く違う制度に戸惑いも隠せませんでした。聞いていたと通りの自主性を大切にする大学ならではの学習法であったり、高校時代には想像もつかなかったような字数のレポートやパソコンスキルを要する課題などには驚いたりもしましたが、何とかそれらもこなしてこれたし、いま

では友達もでき、先輩のアドバイスもお借りしながら履修登録した前期の授業も終えて、4月が懐かしく感じられるほどに大学生活にも慣れてきました。

週に1回の早期臨床実習では、病院に立たせてもらい、まだ専門的な知識はもっていないながらも、見学させていただける内容はすべてが新鮮でわくわくしていたと同時に、歯科のお仕事の大変さや難しさを身をもって感じる事ができ、2年生から本格的に始まる専門授業を頑張っていくよい土台となったように感じます。

あと半年となった、他学部の人たちと気軽に交流できる五十嵐での生活をとおしての友達づくりや、魅かれるもののなかから学びたいものを学べる教養を充実させていくため、いろいろなことに目を向けていきたいし、また将来歯科衛生士や社会福祉士となったときにも生かせるような資格取得などにも挑戦してみたいし、とやりたいことをたくさん思い浮かべ、こなして楽しい4年間の大学生活を送っていききたいと思います。

入学者のことば

歯科矯正学分野 高 辻 華 子



今年、新潟大学大学院医歯学総合研究科へ入学しました。大学時代には大学院進学は考えていませんでした。研修医時代に歯科の世界の深さを知るにつれ、大学院進学を考えるようになりました。大学院に入学し研究に携わるようになり、動物、ヒト、様々なものを使った実験が行われている現場に遭遇し、大学の研究がその分野の発展・向上に寄与していることがわかりました。つまりこれらの研究の実績により、結果が臨床に応用されたり、新しい製品や商品が開発されたりしているわけです。

研究はまさにその道の専門家にしかでき得ない特権、と言って過言ではないと思います。歯科医療に関して言うと、ヒトの身体にはまだまだ未知

の部分があつて、そのひとつひとつをその道の専門家達が探り合っています。民間にも研究者と呼ばれる人は多く存在しますが、そのほとんどが大学院で研究のベースを学んで世に業績の産物を産み出している人達です。同じ分野の研究をしている人の論文を読むと、その人がどんな本を読み勉強しているかがわかるようになります。これもまた刺激的かつその発想のおもしろさや研究発表の構成のうまさによって専門家たるやの一つ上の世界を垣間見ることができます。

新潟大学は今年から大学院のシステムが新しくなり、1年時より論文作成のための英語や統計学の講義を全員が受講するようになり、その他、研究のベースとなる実験方法などをコースワークという形で直接専門の先生方から教授して頂きます。

私は現在、医歯学総合病院にて臨床経験を積みながら大学院生活を送っています。研究では口腔生理学講座にて摂食嚥下の研究に携わっています。ヒトの口腔機能はこれまで多くのことが研究されてきましたが、まだまだ解明されていない事象や、人や企業が望んでいる情報が存在することがわかりました。私も専門家の一人として大学時代は考えられなかった新たな世界を大学院生活の中で広げたいと思います。

大学院に進学して

う蝕学分野 山 中 裕 介



私は今年の4月から、新潟大学大学院医歯学総合研究科、う蝕学分野に進学しました。昨年は新潟大学歯科総合診療室で研修してきましたが、研修が始まって直ぐに進路について考えていました。というのも、歯学部学生の時より「卒業したら、まじめに勉強する。だから学生の間は遊ぶ。」などと、今にして思えばかなりふざけたことを言っていたので、今後の自分が何をやりたいのか、初めて真剣に考えていました。そんなあり、

部活の先輩でありう蝕学分野の当時医員であった重谷先生に、大学院について相談に伺いました。大学院について聞き始めて十分後、『裕介今時間ある？』と言われた直後、興地教授との三者面談が始まり、教授の『ウェルカムですよ。』の一言で、大学院う蝕学分野進学が決定しました。その後、研究の手伝いをしたり、いつの間にか自分の研究を始めたりしているうちに、今年の6月には学会での発表もしてきました。ちなみに、いろんな意味で学会は楽しかったです。

大学院に進学して4ヶ月程経ちました。初めは慣れない環境で不安やストレスを感じたこともあった……と言いたところですが、性格上そんなことは全く感じることなく、のびのびと日々を送

らせてもらっています。やはりう蝕学分野の先生方が若手のための環境づくりをして下さっているおかげなのでしょう。

今は、外来での顕微鏡下での処置や秋の学会に向けての実験、そして書き始めたはいいけど全く進まない英語の論文、と様々なことにチャレンジさせてもらっています。うまく行かないことの方が多いような気もしますが、落ち込んでる暇はないのでとにかく突き進みます。

思わず飛び込んでしまったこの大学院生活を終えたとき、臨床技術の面でも知識の面でも大きく成長した自分がいることを期待しながら、一つ一つ経験を積み重ねていきたいと思います。



入学を祝して

歯学部長 前田 健康

平成21年度新入生の皆さん、厳しい受験競争を勝ち抜いて、新潟大学歯学部に入學おめでとうございます。昭和40（1965）年に設立された新潟大学歯学部は、歯学科に加え、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを取得可能な口腔生命福祉学科を有する国立大学歯学部であります。我々教員ともに、日々進歩する歯科医学、口腔保健医療・福祉を学び、新潟大学歯学部の新しい歴史を築いていきましょう。

新潟大学歯学部では、包括的医療を行うことのできる有能かつ感性豊かな歯科医師の育成、歯科医学発展のために指導的な人材および保健・医療・福祉に貢献する専門職業人の育成を教育目標としています。この教育目標達成するために、さまざまな工夫を凝らしたカリキュラムが編成されています。特に、新潟大学歯学部では「学生自身が自ら学ぶ」ということを教育の柱としています。君たちがこれから新潟大学歯学部で学ぶ講義、実習の内容は社会に出てからのスタートラインに立つための内容でしかありません。歯科医療人、口腔保健・福祉医療人として長い人生を過ごしていくには、日々進歩する学問を常に修得する必要があります。そのためには生涯学習という観点が必要です。生涯学習のためには、自ら学んでいくという態度が不可欠です。医療・福祉を目指すものにとっては、問題を発見し、自ら学習し、問題を解決していくという学習形態（問題発見・解決型学習）が望まれます。本学部では早くから Problem-based learning（PBL）という学習方法を導入しています。このPBLでは教員は学習者の補助者にすぎず、学習の主体は学生であるという概念で、学習が進んでいきます。この教育手法の主眼が「学生自身が自ら学ぶ」ということにあるのはいうま

でもありません。新潟大学歯学部の教育の主役は、教員ではなくて、君たち、学生諸君です。

新潟大学歯学部では早くから教育改善を進め、平成18年には文部科学省事業「特色ある大学教育改革支援プログラム」に採択され、全国歯科大学・歯学部のモデルケースとして高い評価を受けています。さらに、大学院教育レベルでは平成17年度「魅力ある大学院教育イニシアチブ」、平成20年度には「大学院教育改革支援プログラム」に採択され、学部レベルから大学院レベルまで、高い教育の質を担保し続けています。研究面の評価の一つとして科学研究費補助金の採択があげられますが、この補助金の採択率も非常に高く、本学ではトップに位置しており、研究能力の高い教員が君たちの学習支援にあたります。

本年12月末には、新たな実習設備が導入・整備されることとなっており、学生諸君の技能教育に資することとなっています。また、各種教材の整備・充実にも努めており、君たちへの高い学習効果をあげるため、環境整備にも努めています。これらを積極的に活用するようにしてください。本学部の教育改善については高い評価を受け、さらなる教育改善を進めていますが、まだまだ不十分です。また、個別空調設備、視聴覚設備の設置に代表される教育環境の充実を我々教員の視線で行っていますが、やはりこのような環境整備も学生諸君の要望、改善策が新潟大学歯学部をさらによりよい学部としていく基盤となります。学生諸君の立場からみたハード面、ソフト面の改善策を我々教員に積極的に提言してください。そして、さらなる教育改善をともに進めていきましょう。

昨今、歯科医師過剰が叫ばれ、歯科医療の前途を悲観するような報道がなされていますが、君た

ちが歯学部を卒業し、一人前の歯科医療従事者になる10年後は、歯科医療、口腔医療・福祉の重要性はますます増すばかりでなく、種々の統計データから鑑みれば、現在より約2万人の歯科医師がリタイヤすることが想像されており、この分野の人材の不足が早くも懸念されています。短絡的にものをみるのではなく、10年、20年といったロングスパンで人生設計を行い、この柔軟な頭脳をもつこの時期に知識・技能・態度を身につけ、新潟大学歯学部を旅立って欲しいものです。

教育の話ばかり致しましたが、20代前後のこの時期、勉強ばかりだけでなく、クラブ活動、ボランティア活動などさまざまな社会経験をし、歯学部以外にも多くの友人を作り、歯科医療人である前に、教養のある社会人となるよう人間性を磨いてください。そして、社会の期待に応える医療人を目指し、これから充実した学生生活を過ごし、卒業時に、平成21年度入学生全員でまた朱鷺メッセで喜びを分かち合いたいものです。



新潟大学歯学部入学おめでとう

新潟大学医歯学総合病院副院長 齊 藤 力

難関を突破され歯学部歯学科ならびに口腔生命福祉学科に入学された新入生の皆さん、入学おめでとうございます。未来の歯科医学、歯科医療を担うべく全国から集まってきた諸君を心より歓迎いたします。

諸君が学ぶ新潟大学のキャンパスがある新潟市は、平成19年4月1日より日本海側初の政令指定都市となりました。新潟市は日本海、信濃川に囲まれた美しい水の都であり、美味しいお米や日本海の海の幸など食の宝庫であります。新潟市長の篠田昭氏によれば、新潟市を「田園型政令市」と表現するのだそうです。しかしインターネット等の情報網の発達により日本の何処にいても情報量の地域格差はもはや無いに等しく、まさに学ぶには申し分のない環境と思います。

諸君の大多数は歯科医師、歯科衛生士と社会福祉士などのプロフェッショナルになることを希望し、6年後あるいは4年後にそれぞれのライセンスを得ることを目標としていることと思います。歯学部は学部の特性上、職業訓練的なイメージが強いことは事実ですが、医学や歯学という生命科学を探究する場でもあります。近年の医学、歯学の発達は急速で、諸君に求められる情報量は増大の一途をたどっており、とても暗記することだけでは対応しきれません。科学的発想を身につけることこそが最も大事であると思います。でも大丈夫、先輩を見てください。さりげなく？進級して卒業しているでしょう。新潟大学歯学部は、検討に検討を重ねた教育カリキュラムを用意していますので心配はいりません。

諸君の臨床教育の場となる新潟大学医歯学総合病院は、医学・歯科医学が相互に連携した全人的医療、臨床教育、研究の実践を目指して平成15年に従来の医学部附属病院と歯学部附属病院を統合して誕生しました。学生時代は早期臨床実習が1年次よりおこなわれますので、早い段階から本院

で学ぶ機会があります。また、より臨床に即した教育として歯学科では平成18年度から臨床能力を客観的に評価するために開発された客観的臨床能力試験(OSCE)を開始しています。さらに新潟大学歯学部の教育の特徴としては、学生が教員の指導のもとに実際に患者の治療に参加することがあげられます。全国的に臨床実習が見学中心になっている大学が多いという状況をみると、とても恵まれた環境にあるといえます。

もちろん大学生活が知識や技術の習得に偏ってはいけません。歯学部は定員が少なく、また、2年時には五十嵐キャンパスから旭町キャンパスに移動となるため、とても狭いコミュニティーになりがちです。部活動やサークル活動あるいは地域活動を通して多くの人と交流することで幅広い視野を持つことができ、自分の人間性を磨くことにつながると思います。学生時代はなかなか地域の方と交流する機会が少ないかもしれませんが、新潟は“人”がいいですよ。新潟県人の“人の良さ”を実感できる私のお勧めスポットは白山の朝市です。白山の朝市は旭町キャンパスから程近い白山浦という場所で毎朝行われています。地元のおじちゃんやおばちゃんが新鮮な野菜や果物を世間話しながら売っています。良い医療人と聞いてどのような人を想像しますか？「高度な技術や知識の習得」は医療人に求められる当然の義務であり、それに加えて私たちに必要なのは「人間としての暖かさ」です。新潟は現在、NHK大河ドラマ「天地人」の舞台として話題ですが、主人公の直江兼続のように「愛」の心をもった人間になってもらいたいと思います。未来の歯科医学、歯科医療を担うのは諸君です。諸君のやる気にこたえられるよう、病院は最大限の努力を惜しみません。諸君が、新潟県の鳥・トキのように、夢に向かって大きく羽ばたくのを楽しみにしています。

新入生合宿研修を終えて

学生支援委員会委員 田 中 礼
顎顔面放射線学分野・助教

4月11日(土)、12日(日)の2日間、平成21年度新潟大学歯学部新入生合宿研修が、新潟厚生年金スポーツセンター(ウェルサンピア新潟)で開催されました。新入学生72名、学生アシスタント4名、教職員24名に、オブザーバーの先生を迎え、

参加者は総勢101名。大変にぎやかな合宿研修でした。プールもあるし、みんなでワイワイ楽しそう。いえいえ、スケジュールはなかなかタイトです。2日間にわたる「自己研鑽」の様子をご紹介します。

【日 程】

4月11日(土)		4月12日(日)	
8:35	歯学部出発(バス)	6:30	起床
8:45	新潟大学西門出発(バス)	7:00	朝食
9:15	会場到着 写真撮影	8:30	全体ガイダンスII
9:30	全体ガイダンスI	9:00	BLS 講習
10:40	自己研鑽セミナーI	11:20	閉会式
12:30	昼食	11:45	会場出発(バス)
13:30	自己研鑽セミナーII	12:15	歯学部到着・解散
17:15	入浴・自由時間		
18:15	夕食(クラブ・Wホーム紹介)		
20:00	教職員と懇談/プロダクト作成		
22:00	就寝		

4月11日(土)

よく晴れ、絶好の合宿日和(?)となりました。マイクロバスの到着が予定より少し遅れてバタバタしましたが、まずは会場入り口で集合写真の撮影です。「ハイ、もう一枚」。3枚目くらいからは

Vサインも出て、皆さん表情がすいぶん軽くなりました。(写真①:会場到着・写真撮影)

9:30からは全体ガイダンスI。前田歯学部長、齊藤(力)副病院長、絹川新潟大学理事からご挨拶をいただき、参加スタッフ紹介の後、歯学部の



写真①



写真②

カリキュラム、全国共用試験、院内感染対策、学生支援とセクハラ相談に関する事など、充実した学生生活を送るうえで大切なことについて担当教員から説明がありました。またも、緊張の面持ち。(写真②：全体ガイダンスI)

いよいよ8班に分かれて自己研鑽セミナーの始まりです。自作のネームプレートをついたら2人1組になり他己紹介(グループのみんなに自分ではなく相手のことを紹介します)のための情報収集を行います。2分間でいろいろ質問するのは案外難しいことです。でも、これで少しグループのメンバーと話しやすくなりました。(写真③：ネームプレートをつけて他己紹介)

つづいて、「砂漠で遭難したときにどうするか(NAS Aの問題)」というシナリオをもとにしたコンセンサスゲームを行いました。最寄りの居住地までは100km以上ある灼熱の砂漠で遭難した時に、所持している12個の品物について、生き残るためにどう順位づけするか、という問題です。個人個人の意見とグループの意見から、集団討論の方法について学びました。白熱した討論の結果、生き残れたグループは? 単独行動していれば生き残れたはずなのに! ここが砂漠じゃなくて良かった、ホント。

ようやく、お昼ご飯です。今日はまだまだ続きます。

昼食後は、13:30から17:00まで自己研鑽セミナーIIです。「面接試験にもの申す『異論/反論/オブジェクション』一面接試験での問題点と対策を検討する」というテーマで、受験生の視点から面接試験の良い点、問題点とそれらに対する対



写真③

策を考えてもらいました。K-J法や二次元展開法といった手法を用いて各グループで討議し、プロダクトを作成し、全員の前で発表してもらいました。ここで出された貴重な「生の声」は新潟大学歯学部面接試験に反映されているそうです。ここぞとばかり、鋭い意見が続出しました。(写真④：K-J法、写真⑤：プロダクトづくり、写真⑥：発表時間、写真⑦：発表口班、写真⑧：発表F班)

1日目の終盤。夕食の時間に合わせてクラブ紹介のために先輩学生が集まりました。ちょっと過激なパフォーマンスもありましたが、びっくりしたり、笑ったり、和気藹々。先輩たちの「新潟大学歯学部へようこそ」の気持ちを感じてもらえたことと思います。その後、教員との懇談会も大いに盛り上がりました。(正直言って、あんなにたくさんの学生に参加してもらえるなんて想像してなかったもので、感激しました。)(写真⑨：夕食)

4月12日(日)

2日目の朝。6:30起床、7:00朝食、8:30から全体ガイダンスII。寝坊した学生はいなかったようです。昨晩は、プロダクト作成や懇談でかなり遅くまでがんばっていましたが、若いって強い。

9:00から2日目のメインであるBLS講習会が行われました。Basic Life Supportの頭文字をとってBLS。意識を失った傷病者に対して、器具や薬剤を用いないで行う一次救命処置をいいます。講師の歯科侵襲管理学分野准教授の瀬尾憲司先生から説明を受けた後、新入生全員がグループに分かれ、マネキンを使って救命処置を



写真④



写真⑤



写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨

実践しました。意識の有無の確認、呼吸の有無の確認と気道の確保、人工呼吸、心臓マッサージなど、実際にやってみると想像以上に体力がいりません。懸命に息を吹き込んでもマネキンの胸はなかなか膨らんでくれないし（ちゃんと空気が入ると膨らむ仕掛けです）、心臓マッサージのリズムは速く、メトロノームが容赦なくリズムを刻みます。（写真⑩：BLS）

この一連の処置の中で、AED(Automated

External Defibrillator; 自動体外式除細動器)の使い方も習い、実物ではないのですが模擬実習を行いました。AEDは、痙攣してポンプの働きを失った心臓に電気ショックを与え、正常なリズムに戻す医療機器です。駅や空港、ホテル、学校、劇場、スポーツセンターなど、人が多く集まるところを中心に、いたるところでよく見かけますが、5年ほど前から医療従事者ではない一般の人でも使えるようになりました。心室細動を起



写真⑩

こすと、1分経過するごとに助かる確率が約10%減るそうです。救急車が現場に到着するまでの平均時間は約6分。医療従事者としての第一歩を踏み出した新入生全員が、この6分間の一次救命処置がいかに重要かを認識し、汗をかきながら真剣に取り組みました。(写真⑩：AED)

新入生合宿研修のすべてのプログラムが終了し、閉会となりました。自己研鑽の成果はいかがでしたでしょうか。新潟大学歯学部は、人間性豊かで自ら問題を解決できる能力を持つ歯科医師を育てることを目標としています。この合宿研修プログラ



写真⑪

ムから、コミュニケーションのあり方の基本、問題を見つけ解決方法を探ること、人と議論することの重要性など少なからず学んだことと思います。そして、一番の収穫は、土曜日の朝の堅く不安そうな表情が、日曜日には見えなくなったことではないでしょうか。昨日は知らない人だらけだったけれど、今日はみんなが仲間になって心強い気持ちですよね。卒業までずっと一緒ですから良くも悪くもありますが、是非、この合宿研修での成果を生かし、互いを尊重し、協力し、深く議論し、互いを高め合える関係を築いてください。



文化部の逆襲!?

顎顔面放射線学分野 林 孝 文

新潟大学には多数の全学サークルがありますが、歯学部にも独自のクラブ活動があります。歯科に限らず医療活動というものは、人と人との繋がりが仕事を呼びこんでくる職業でもありますので、人脈形成を含めた社会的な活動展開の基盤として、教員としては積極的に参加することを勧めています。

クラブ活動は運動系（運動部）と文化系（文化部）に大別されますが、歯学部の運動部には、スキー部、バレーボール部、卓球部、弓道部、バドミントン部、剣道部、ゴルフ部、硬式テニス部、軟式野球部、バスケットボール部、ラグビー部、サッカー部、水泳部、柔道部があり、文化部には、軽音楽部、茶道部、パソコン部があります。運動部には夏季と冬季に全国的に行われている全日本歯科学学生総合体育大会（「歯学体」あるいは「オールデンタル」・「デンタル」と呼ばれています）があり、ここへの出場、優勝をひとつの目標として日々の活動を行っています。運動部はこのように活動内容が明快なために華々しく表舞台に立ちやすいのに対し、文化部は「何をやっているのかわかりづらい」イメージがあり、陰が薄い印象があるかもしれません。特に歯学部では、クラブの数から見ても圧倒的に運動系優位です。しかし、文化部の活動は実際にはその範囲も広く多様であり、たいへん活発に行なわれているのです。

私は現在、軽音楽部、茶道部、パソコン部と、文化部すべての顧問を担当しています。大学在学中は、現在活動はしていませんが、歯学部の写真部に所属していたことがあります。全学サークルでアニメーション作成に参加していた時期もあり、さまざまな映像表現を試みていましたが、今となってはそのときの思いが現在の仕事の原動力に繋がっているようにも思います。文化系クラブ活動への思い入れは人一倍あると自負しています。

最近では文化系クラブ活動も幅が広がり、全国のさまざまな大学でも参加者が増えつつあるとされています。現代において、世界が日本に期待するもののひとつに、日本独自の美意識に裏打ちされた文化があるといわれています。胸を張って、自分たちの活動を世界に発信するのも、楽しいとは思いませんか。このたび、私は歯学部ニュースの構成を見直し、学生たちの生き生きとした活動を積極的にお伝えする紙面を増やしていきたいと考えていますが、その第一弾として、マイナーな印象をもたれがちな文化系クラブ活動にスポットを当て、「文化部の逆襲!？」とちょっと過激な題をつけて、その具体的な活動内容を、軽音楽部と茶道部の代表者から紹介してもらおうと思います。ぜひお読みいただき、文化部の活動にも興味を持っていただけたら幸甚です。



軽音楽部 (LIARS)って どんなイメージ？

歯学科4年生 小林 太一

軽音楽部というどんなイメージをお持ちでしょうか？「ギターとか楽器の経験がないと駄目？」「ベースって何？」「ドラムって初心者には難しい？」などといった、ちょっと参加しづらい、もしくは楽器は難しいといったようなイメージを持っている方も少なくはないと思います。しかし、実際の軽音楽部はそのような難しいものではありません。むしろ初心者から始めても平気な部活です。皆さんがもしそのようなイメージをお持ちでしたら、それを少し変えさせていただくために、軽音楽部を少し紹介してみようと思います。

現在、軽音楽部は部員16人で活動しています。主な活動はバンド単位での練習、そしてライブになります。バンドでの練習場所は歯学部の講堂をお借りしています。週何回という決まりは特になく、各バンド予定をあわせて自由に行っています。アンプやスピーカー、ドラムといった器材は軽音楽部で持っているため、部員は自分の楽器を持ってきてだけです。初心者の方はここで先輩や同学年の同じ楽器が弾ける人に教えてもらいます。講堂が使えないときには近くの楽器店のスタジオを使用します。楽器や楽譜などの購入など、いろいろお世話になる楽器店です。

バンドで演奏する曲はさまざまです。特定のアーティストのコピーをやるバンドもあれば、メンバーがやりたい曲を選んでいろいろな曲を演奏するバンドなど多種多様です。過去にはオリジナルを作ったバンドもあります。1人ひとつのバンド、といったような制約はなく、何個も掛け持ちしている人もいます。いずれにせよ好きな曲をバンドのメンバーと練習している時間は何物にも代えられない楽しい時間です。

また月に1回ミーティングを開き、ライブの日

程など決めていきます。ミーティング終了後は部員で飲みに行くなど、先輩後輩関係なく交流しています。

さて、軽音といえばライブイベントです。今までの練習の成果を発揮する、楽しみでもあり、少し緊張する場でもあります。軽音楽部では新歓と歯学祭、ライブハウスで行う定コン(定期コンサート)、そして追いコンが1年で行うライブになります。特に大きなイベントとなるのが10月の歯学祭とそこからほぼ間をおかずに続く、11月の定コンです。歯学祭では講堂を使用してもらい、歯学祭の一環として歯学祭を盛り上げます。多くの方は生のバンドの演奏というものを聞いたことはないと思いますが、歯学祭では気軽に生のバンドの演奏を聞くことができます。その迫力、音の力に圧倒される方も少なくないはずで。歯学祭へお越しの際はぜひ講堂へ足を運んでみてください。初心者として入った新入生もこのころになると先輩たちと遜色ない演奏を披露してくれます。

ライブハウスを1日借り切って行う定コンは医学部の軽音楽部にも参加してもらい、学部の枠を超えてのライブとなります。歯学祭とはまた違う、ライブハウスという普段なかなか訪れることのない



2008.10.25 歯学祭ライブのあとで

い場所でのライブとなるので、観客の方にも日常とは切り離された特別な雰囲気、盛り上がり味わっていただけるかと思います。

このように活動している軽音学部ですが、運動部と違いデントルのような大会がありません。このデメリットは他の学部、大学との交流が運動部より狭くなってしまふことになります。あまり歯学部だけの軽音楽部とならないように現在では医学部の軽音楽部と協力し、学部を超えてライブに参加してもらったりしています。かつては今まで以上に医学部との交流は多かったそうなので、よ

り多くの交流を図りたいと思います。また、今後は歯学部・医学部といった旭町キャンパスの枠を離れ、五十嵐の全学サークルと共同でライブを開いたりできれば、と思っています。

軽音楽部という部活のイメージは変わったでしょうか。決して敷居の高い部活でもなければ、「楽器なんかまったくやったことがない」という人でもまったく問題ありません。軽音楽部の当面の目標は、部員数の増加です。音楽が好きなら大丈夫です。新入部員はいつでも大歓迎です。お待ちしております。





2009.3.14 卒業ライブの風景



茶道部って楽しいの？

歯学科4年生 上村 藍太郎

私が茶道部に入ったのは、一年生の冬でした。茶道部に入ってからよく訊かれることがあります。ひとつは、「茶道部って何をやっているの?」ということ。もうひとつは、「茶道部って大会があるの?」ということ。これに対する私の答えは決まっています。最初の質問には、「お茶をたてて、お茶を飲んで、お菓子を食べて…」次の質問には、「茶道部に大会はないよ」。こう答えると、決まって次の質問が返ってきます。「で、茶道って楽しいの?」。

みなさんは、茶道に対してどのようなイメージをお持ちでしょうか。時代劇では、必ずといってよいほど、茶道の場面が見られます。きれいな着物を身にまとったやんごとない人がお茶を振舞っていたり、あるいは、お茶を飲みながら渋い顔をした武士が何やら物騒な話をしていたり。なんとなく敷居が高い*と思われるかもしれません。しかし、茶道は決してそのようなものではありません。日常の連続です。時代劇で見るとは、少なくとも私たち茶道部員にとっては、遠い遠い世界です。日常の連続でありながら、お茶室という非日常の空間で茶道を楽しむ。これが私たち茶道部の活動です。

茶道部は部員8名で活動しています。流派は江戸千家です。活動は週1回、澁谷后雪先生のご指導のもと、池原会館（医歯学図書館隣）の和室で行っています。決して立派な部屋ではありませんが、床の間も炉もあります。お茶室としてはこれで十分です。静かなお茶室で過ごす一時は、忙しい日常から解放され、ひと息つくことのできる貴重な時間です。

茶道の所作を練習することはもちろんですが、お稽古を通して先生から多くのことを教えていた

だきます。お道具のことや、季節の花などについてです。きれいな歩き方や社会人に求められるマナー、おもてなしの心について教えていただくこともあります。どれもこれから大切にしていきたいことばかりです。お稽古では各人が真剣に取り組みますが、部活が終わった後に部員同士で飲みに行くこともあります。茶道部は、先輩・後輩が気兼ねなく交流する楽しい部活です。

さきほど茶道部に大会はないといいましたが、その代わりといえるものとしてお茶会があります。1年生、2年生の頃のお茶会は、緊張の連続でした。お点前のときだけではなく、客としてお茶席に入るときにも緊張したことを覚えています。茶道を始めてすぐの頃は、お茶会でお茶をいただくのも一苦労です。回を重ねてお茶を楽しくいただけるようになると、次の楽しみは、床の間の掛け軸や、お茶碗などのお道具を拝見することです。掛け軸にかかっていることや、お茶碗の釉薬の流れ具合、茶器の絵柄などを楽しめます。興味があれば、お点前が終わったあとにじっくりと拝見することもできます。これらを拝見し、日常生活から遠くなってしまった“日本文化”に触れることは、茶道部で活動する楽しみのひとつです。

私たちが参加しているお茶会は、5月の開学記念茶会、10月の歯学祭、そして11月の学生茶会です。開学記念茶会は、白山公園の燕喜館で行われます。このお茶会には、私たちのほかに、五十嵐キャンパスで活動している茶道部も参加します。学生茶会ではさらに、他大学の茶道部も参加し、白山公園の燕喜館と北方文化博物館新潟分館の両方で行われます。歯学祭では、歯学部の病院大会議室で行っています。みなさんが気軽に足を運んでいただけるお茶会は、歯学祭のお茶席ではない

でしょうか。ここでは、気軽にお茶を楽しんでいただけるように、立礼^{りゅうれい}で盆略点前^{のどて}を行っていません。立礼では、お茶をたてる人もお茶をいただく人も椅子に腰掛けます。正座をして足がしびれる、ということはありません。歯学祭のお茶席は野点^{のどて}をイメージしており、赤い大きな傘の下でお茶をたてます。傘をたて、香を焚いて行うお茶席の雰囲気は、普段の会議室からは想像できないものです。歯学祭に足を運んでいただいた折には、ぜひ、一服のお茶を楽しんでください。

2年前、茶道部は創部40年を迎えました。この節目の年に、江戸千家茶道部創部40周年記念茶会を白山公園の燕喜館にて催しました。お茶会には、茶道部員のほかに、30名余りもの茶道部OB・OGの先生方にもご参加いただきました。お茶会

では、参加された先生方から思い出をいろいろとお聞きすることができました。みんなで飲みに行ったことや、緊張して初めてのお茶会に臨んだこと。どれも今の自分たちと変わらないものでした。茶道部OB・OGの先生方が学生時代を振り返ったとき、楽しかった茶道部での活動が思い出されるようです。

茶道部の楽しさがお分かりいただけでしょうか。茶道部の当面の目標は、部員を増やすことです。現在、茶道部員は歯学部生のみですが、数年前までは医学部生も所属していました。今後は、医学部生にも声をかけ、昔のような大所帯の部活にしたいと考えています。新入部員は随時募集しています。お待ちしております。



一昨年度の創部40周年記念茶会の際の写真



* 編者注：〔敷居が高い〕の本来の意味（相手に不義理などがありその人の家に行きにくい）とは異なる用法ですが、ここでは「高級すぎたりして入りにくい」の意味で使っています。

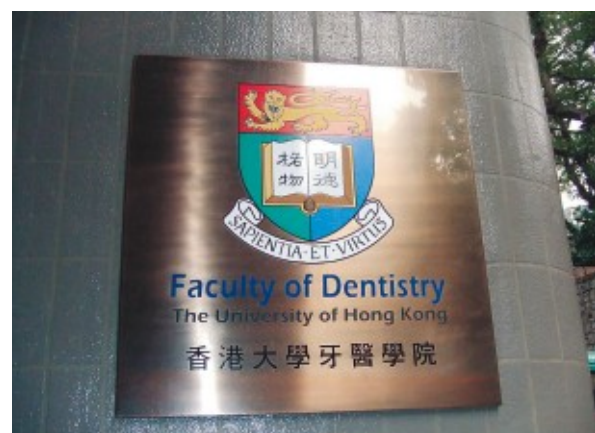
新潟大学「学生海外実習等プログラム支援事業」による 香港大学歯学部訪問

大学院医歯学総合研究科 魚島勝美
(生体歯科補綴学分野)

新潟大学では平成20年度より、学生が海外で行う実習や調査に対して支援を行う事業を開始しました。本学歯学部でも、積極的に海外を見聞し、歯学部や大学院学生としてのみならず、人間としての視野を広めて欲しいと考え、これに応募いたしましたところ、採択していただきました。そこでこの支援を受けて、歯学部4年生（当時）の塩生君、南君、大学院2年生（当時）の長澤君の3名が、平成21年3月16日から19日まで香港大学歯学部を訪問して参りました。塩生君、南君は同じく4年生の君（きみ）君と共に、平成20年度のSCRIP（Student Clinician Research Program）に参加したメンバーで、長澤君には毎年SCRIPの世話役をしてもらっています。

訪問先の香港大学歯学部は香港の中心部にあって、その附属病院は主に教育病院として機能しています。つまり、歯学部附属病院を訪れる患者様

の大半は学生実習室において治療を受けると言うことです。ですから、日本のように学生実習にご協力いただける患者様を確保するために苦勞することがなく、臨床教育面では非常に恵まれた環境に学生達はおかれています。また、歯学部のプログラムはPBL（Problem Based Learning：少人数グループでの討論による自主学習）を軸として構成され、いわゆる全面的PBLカリキュラムが提供されています。イメージしにくいかもしれませんが、歯学部教育において、1年生入学時から卒業時まで、いわゆる受身の講義形式で教えられることは少なく、多くの学習は学生が自ら調べることで行われているということです。本学歯学部でも部分的にPBLを導入しており、その有効性は認識されているところですが、香港大学歯学部はこれを全面的に取り入れて成功している、世界でも数少ない歯学部のひとつです。香



香港大学歯学部附属病院看板



歯学部スタッフとの討論（左より長澤、南、塩生）

港は現在中国に返還されていますが、その国際性という点ではおそらく返還前とほとんど変わらないのでしょうか。在籍する学生の国籍は多岐に亘り、教員の多くも欧米から招聘されているので、講義等もすべて英語で行われています。

今回の訪問は現地滞在が4日間弱と短く、多くのことは望めないと思っておりましたが、幸い先方の歯学部長を始め多くのスタッフの方々が非常に好意的にアレンジをして下さいました。その結果、当方学生達はPBLへの直接参加、歯学部スタッフとの討論、歯学部学生との討論と交流、歯学部施設見学、病院施設見学と、多くの貴重な経験をすることができたと思っております（写真参照）。その結果、日本の歯学教育と香港のそれとの違い、歯学部学生の意識の違い、共通の問題点や検討課題、それぞれに特有の課題など、多くのことを感じ、考える絶好の機会になったものと思います。

今までにも本紙面上で度々ご報告して参りましたが、我々は歯学部の学生を対象としたSCRIP（日本歯科医師会主催）に継続的に参加をしております。若い皆さんが早い段階で歯学研究に少しでも触れること、そして日本国内のみならず広く海外の存在を意識することが非常に重要であると考えているからです。しかしながら、それで



香港大学歯学部長（前列左）を交えて

もなお、学生にとっては海外旅行以外で訪れる海外は遠い存在です。医歯学総合病院歯科および歯学部では近年、ロシアや台湾からの学生を毎年受け入れており、それら海外の歯学部学生にとっては一定の成果があがっていると思われます。同じようにこちらから海外に積極的に出て行き、その実情を自身の目で見、直接現地学生やスタッフとコミュニケーションを取ることは、後には得られないであろう視野の広がりをもたらします。後掲する、今回参加した3名の学生達の報告をお読みいただければ、彼女達が感じてきたある種のカルチャーショックをご理解いただけるものと思っております。私自身は今後もできるだけ多くのやる気のある学生を海外に連れ出したいと思っておりますが、大学をはじめとする関係各組織においても、海外学生実習等プログラム支援事業の拡大・継続を含めて、積極的なご支援を今後とも是非お願いしたいと思っております。

最後に、今回の香港大学訪問は、国際交流専門委員会の委員長である山田秋好副学長をはじめ、多くの方々にご支援をいただいて実現したものです。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。どうも有り難うございました。

以下、今回の参加者3名の「香港大学歯学部を訪問して」と題する報告です。

生体歯科補綴学分野 長澤 麻沙子
大学院3年生

今回の香港大学訪問では、PBLへの参加、ポリクリ見学、病院見学を行ないました。PBLでは、本学のように学生達がずっとおとなしく椅子に

座っている様子はなく、全体的に話し合いに活気がある印象を受けました。入学後の早期から身につけてきた学習方法であるせいか、学生達は討論そのものに慣れていて、ホワイトボードへのまとめ方も簡潔で分かりやすい印象でした。私の見学

したグループでは、学生の討論が停滞や脱線をしたときに、ファシリテーターとのテンポの良い会話で話し合いが前進していましたし、学生に考えさせる時間を多く確保する、学生の発言に対して「何故思うのか」「もっと考えて」といった有効な問いかけをする、といったファシリテーターの役割が重要であると感じました。学生はある質問に答えられないと、どうして答えられないかを考えることになり、必然的に学習課題と自分たちの問題点が見えてくることとなります。ファシリテーターのPBLに対する目的意識如何により、その時間がどのように学生にとって効果的に消化されるかを感じました。また具体的には、本学に比べてシナリオが短く、情報量がそれほど多くないこと、討論の最後に該当学習課題に関する情報ソースに関する情報提供をしっかりとすることで学生の効果的学習を促進すること、などの違いもありました。

PBLは自分たちにとって役立っているか、また、PBLがポリクリに役立っているか、を学生達に聞いたところ、その評価はまちまちでした。フルPBLが学生にどう評価されているか、5年間に亘る学習に対するモチベーションをどのように継続しているのかは興味深いところです。新潟大学の学生と比較して同じアンケート等で調べられたら面白いと思いました。

ポリクリ見学では臨床実習と根管治療実習を見学しました。見学中に一番感じたことは、香港の学生達とはとにかくよく話しかけてくるということでした。外国人とのコミュニケーションに抵抗がなく、その積極性や言語能力・会話能力の高さを実感しました。香港大学では授業はほぼ英語です

し(しかし学生同士の会話は広東語)、生徒の半分が中国以外の出身であるということも影響していると思いますが、英語が話せて当然という感覚は日本人にはあまりないものであり、それ自体が世界の国々に対する日本の障害になっているところだと感じました。たとえ海外からの訪問者とのほんの少しの会話でも、積み重ねれば大きな情報源です。

臨床実習は4年生が実際の患者様を治療していましたが、それと並行して1年生が見学をしていました。ただしそれはただの見学ではなく、4年生やそのアシスタント、患者様にさえ積極的に質問しないと解答を導き出せない課題を与えられた結果であり、真剣さが感じられました。と同時に4年生は自分のやっていることを教えなくてはならないため、彼らにとっても非常に学習効果が高いと感じました。

根管治療実習で印象的だったのは、ライターと学生とのディスカッションが常にどこかで行なわれていることでした。そこでもライターは学生に考えさせるような質問を投げかけていましたし、同時に実習を行なうために必要なことを丁寧に解説していました。どこかで討論が始まると自然に人が集まってくるのが特徴的で、PBLの経験がポリクリでも生かされていると感じました。また実習機が横1列に並んだ本学とは違ってアイランド型でした。これも討論を促進するひとつの要素であるようでした。今回の見学を通して強く感じたことは、病院を含めた大学全体の学生教育に対する積極的な姿勢と、それに伴うスタッフや設備等の充実がなされているということでした。

今回の香港大学訪問における最も大きな成果



外来見学：予診担当スタッフと



PBLに参加して

は、塩生さん、南さんが卒前に他大学、特に外国の大学を見学する機会を得、それが彼女らに大きな影響を及ぼした、ということだと思います。彼女らはいわゆるカルチャーショックを受け、香港の学生が同じ年とは思えない、自分たちはこのままではいけないというようなことを滞在中常に口にしていました（もちろん日本の良さも同時に認識したはずです）。このことは、大学院生である私にも当然言えることですが、今回彼女達と共に行動して、とくに卒前でのインパクトの大きさを感じたのです。歯科医師を目指す学生が何を具体的な目標に、どうあるべきかは、自分の置かれた環境の中だけではどうしてもイメージしにくいと思います。自分たちの置かれている環境が全てであると認識してしまう危険性すらあります。今後も

希望する学生に対して、大学は積極的に彼らの頭が柔軟な早い時期に海外に出る機会を与えることは有益であると思いますし、そのことが以降の学生生活を有意義なものにする可能性が非常に高いと思います。同じ歯科医師を目指すものとして、諸外国の学生と自分たちを比較することは大学教育の1つの手段として、学生のモチベーションを上げることに非常に有用であると思われました。

最後に今回このような機会を与えてくださった、関係者の方々にこの場をお借りして御礼を申し上げます。今回の経験を新潟大学のためにフィードバックしたいと思います。ありがとうございました。

歯学科5年生 塩生 有希

今回、私たちは3月中旬に香港大学歯学部を訪問する機会をいただくことができました。香港は中国の特別行政区のひとつであり、人口は約700万人です。近年では日本と同様に高齢化・少子化が進んでいます。香港大学歯学部は香港唯一の歯学部で、歯科医師数は2千人程度です。このため香港における歯科医師はとても地位や給料の高い職業とみなされているようでした。

一方、日本には歯学部・歯科大学が29校も存在し、歯科医師数は約10万人で、歯科医師の過剰が問題視されています。そしてここで何より問題なのは、技量や知識に欠ける歯科医師の存在です。今後、歯学に関わる私たちは、こうした歯科医師

を生み出してしまう現在の歯学教育を見直し、改善していかなければならないと思います。そこで、今回の訪問を通して日本の歯学教育に有用だと感じた点を中心に述べたいと思います。

今回の訪問では、3学年のProblem Based Learning (PBL) への参加、2学年の根管治療実習の見学、4学年の患者様に対する治療の見学、歯学科1年生と歯科衛生士を目指す2年生とが交流しながらの実習、病院・技工室等の見学を行いました。

PBLとは、少人数のグループに対してある症例が与えられ、1回目のチュートリアルで議論しながら問題提起がなされた後、その問題に関するSelf-directed Learningが行われ、2回目のチュートリアルで各自調べた情報を元に再び討



基礎実習風景

論をするという学習方法です。我が新潟大学歯学部では数年前から5年次に約半年間だけ取り入れていますが、香港大学歯学部では1年次から卒業する5年次まで取り入れられています。1年次においては、PBLが95%を占めるほど、PBL主体の教育方法となっています。PBLを行うにあたっての香港大学の工夫として、7～8週を1モジュールとして、1モジュールごとにグループ再編成を行い、担当ファシリテーターも毎回変えています。そうすることで、グループ間での学習効果への影響の差をなくすとともに、メンバーを変えることで個人の倦怠感を無くし、意欲を持たせる効果が期待できるようです。また、2回目のチュートリアル後に各グループでレポートやポスター、ビデオ、role-playといった形でまとめられたものは、web-siteにupされます。これは学生の意欲を大きく向上させているようでした。また、要望があれば、1モジュール終了後にレクチャーを行っており、このような支援体制を提供することでさらなる学習効果が期待できると感じました。

実習の見学では、早期からの実習開始、設備の良さ、我が校よりも最新の器具の使用等が顕著に見られました。特に印象的だったのは、少人数ごとにデモが行われ、デモの最中に学生から質問が飛び交い、先生は逆に質問をし返すことで学生に答えを導いていたことです。この方法にはPBLが活かされているように感じました。

また、歯学科1年生と歯科衛生士を目指す2年生とが交流しながらの実習は我が校にはありません。こうした異なる学科が交流しながら、学生が学生に教えるという教育方法はとても興味深く、有効ではないかと思いました。逆に、歯科医師と歯科衛生士は密接に関わる職業なのに、なぜこうしたものが我が校には無いのか、不思議に思いました。



臨床実習室

病院見学では、施設の新しさ、学生の教育や卒業後を考慮した工夫が感じられました。香港においては香港大学歯学部が唯一の歯科医師養成機関であるということが、歯科界全体での歯学教育の重要性認識を背景に、大学側の教育に対する積極的姿勢、すなわち学習環境(PBL室、講義室、外国語の選択授業の充実、図書室、実習室、病院等)の整備に繋がり、結果としてそれが学生の学習意欲向上へと繋がっていると感じました。

日本では大学が多く存在するため全大学が団結して教育を改善することは非常に困難なのかもしれませんが、決してあきらめてはいけないと思います。各大学が歯科界のあるべき姿を考えて改善していけば明るい将来が見えてくると信じて、我が新潟大学歯学部においても教育に力を入れる必要があると思いました。

最後に、今回香港の学生と触れ合って、香港の学生は、同じ学生と思えないほど、人間性が豊かで、積極的で、国際的であることを目の当たりにしました。この積極性や国際化には外国語(英語や日本語など)が頻用されていることが大きく関わっていると思います。今回改めて、外国語を学ぶことの必要性を痛感しました。我が校でも積極的に外国語を取り入れていくべきだと思います。このような機会を与えていただき、どうも有難うございました。

歯学科5年生 南 智香子

今回、平成20年度新潟大学国際交流委員会事業の一環として香港大学歯学部への訪問の機会をい

ただきました。3日間という短い期間ではありましたが、多くのことを経験し学ぶことができました。

私は、今年の8月に開催された Student

Clinician Research Programに参加し、全国の歯学部生と交流する機会を得ました。その交流から大学案内やインターネットといった情報からは得ることのできない実際の大学の様子や、自分達との相違点などを知りえることができ良い刺激となり、同時に、さらに多くの学生と交流を深めて視野を広げたいと思うようになりました。また、歯学科5年次から始まるPBLによる授業が、海外の大学ではどのように行われているのか非常に興味があり、PBLの世界的先駆者である香港大学を訪ね、これからの学習に役立てたいと考えました。

香港大学での初日は、まず歯学部3年生のPBLに参加させていただきました。私達も4年次に数回のPBLの経験がありますが、比較すると異なる点が多く見受けられました。学生は1年次からPBLを行っているせいもあり、役割分担、時間配分など学生主体でスムーズに授業は進行されていきます。日本では学生が意見を出し合うまでには時間がかかりますが、現地の学生においてはほとんどの学生が意見を積極的に発言します。そこからは、毎回のPBLにおいて最大限に学び取ろう、無駄にしないといった態度がうかがえました。また、学生とファシリテーターの関係も日本とは少し異なり、学生達が効率良く学習が進められるように、なおかつ主体はあくまで学生であるといったあり方は私の目には新鮮にうつりました。私達が普段受けているような講義形式では、どうしても学生は受身となり、問題処理能力を養うというよりは、多くの場合情報を付与されるだけとなり、その情報を生かす能力に欠けてしまいます。つまり、そのケースごとに必要な情報



歯科医師歯科衛生士合同臨床実習室にて

を自らのストックの中から取り出す訓練がなされないということです。これは臨床においては致命的なことであり、この能力は早期から養わなければならないものだと思います。また講義形式であると、診療科ごとまた基礎科目と臨床科目といった風にカテゴリーができてしまい、情報を総合的にとらえづらくなります。一方、PBL形式であるとそういったことが少なく、全体的に物事をとらえやすく、学習範囲を狭めることはありません。これは、学生の基礎科目離れを抑制する効果もあるのではないかと感じました。しかし、一方で問題点もあるようでした。PBLは自ら積極的に参加して初めて学習効果があります。そのため、そういったことを不得意とする学生には望ましい効果が得られません。もちろん香港大学にはサポート体制がありますが、まだまだ課題があるようでした。

大学の計らいで学部学生との交流の機会もいただき、学生の立場からの意見も得ることができ多くの刺激を受けました。PBLや授業について以外にも、現地の大学生活の様子を聞くことができ実状を知り、日本と香港との違いも多々ありましたが、同じ歯学を学ぶ学生同士の共通点もあり興味深かったです。彼らとの交流で感じたことは、歯学部の学生としての自覚や誇りを低学年の時から持っていることでした。香港は、日本とは異なり5年制であるため早期から臨床科目の実習が始まります。そういったことが背景にあるのかもしれませんが、私自身見習わなければいけない部分が多くありました。この交流を今回だけのものとせず、これからも親交を深めていきたいと考えています。

初日の午後と2日目は、学生の実習風景、Polyclinicや病院を見学させていただきました。学生と教員が対話しやすいように実習室が工夫されていて、私たちが実習中に感じる不便さを現地では感じることはありませんでした。実習自体もPBLが生かされていて、教員がデモンストレーションを行うだけでなく、学生の質問や意見をうまく引き出すようなものでした。また、日本とは異なり学生実習においても教員だけでなく様々なスタッフが実習を支え、大学そして病院全体で

学生を教育するシステムが確立されているよう感じました。病院の設備も日本と遜色ないか、それ以上の機材もあり、また日本とは異なる診療体制であったりと海外の歯科事情を直接知ることができました。

今回の香港大学歯学部訪問は、私にとって非常に有意義な時間でした。今回学んだことを、これからの学生生活や歯科医師人生に役立てていきたいと考えています。どうも有り難うございました。



香港大学歯学部学生との交流

おもいでばろばろ

医歯学系・特任教員 原 田 史 子

こんにちは。歯科矯正学分野の原田と申します。「大学院へ行こう！」というテーマですので、もう何年も前のこととなりますが、私の大学院時代の思い出について書いてみたいと思います。

今から10年程前、当時花田晃治教授の下、歯科矯正学分野に入局しました。私は南の国、鹿児島大学の卒業ですが、そもそも、なぜ新潟大学の大学院を選んだのかというと、私は学生時代には、南は熱帯魚のいる海、砂浜には天然砂蒸し温泉、北に行けば霧島山麓のごうごうと湧き出る硫黄泉、そして今や全国区になった芋焼酎を堪能していました。そこで卒後の進路を考えた時、「鹿児島は地元からちょっと遠い（出身は長野県なので）、でもやっぱり海も山もあるところに行きたい。」と思い、矯正科のアクティビティも高いと聞き、新潟大学の大学院を受験しました。

大学院では現、前田歯学部長の率いる口腔解剖学分野で研究することになりました。研究室では、様々な分野の臨床系の先生や留学生が研究していました。他大学出身の私にとって、大学院での縦、横の繋がりはとても嬉しかったです。

夏には、大学院の講義「Writing Academic English」の講師、John先生の別荘へ合宿に行きました。私たち大学院生は、八ヶ岳の一つである編笠岳に登りました。当時のA助教授（現北海道大学教授）も、「僕も登ってみようかな？」ということで、一緒に登りました。途中4合目付近、A先生は大粒の汗をかいて、顔色も悪く完全にバテた状態になりましたが、なんとか励まし合い、全員で山頂から素晴らしい景色を眺め、達成感を味わいました。下山後、前田教授に報告すると「馬鹿だな～。脱落者は見捨てるんだあ～！」と言われました。そ、そんなあ。



齋藤功教授（右）と韓国矯正歯科学会にて

そんな指導方針の前田教授をはじめ、研究面では、教員の先生、先輩方、技術職員の方々にご指導いただきました。実験が大変な時や4年生で追い込まれている時には、精神面でも支えていただきました。同期の存在はお互いに励みになりました。実験は、なかなか思うようには進みませんでしたが、紆余曲折があった分だけ、結果が出た時には嬉しかったものです。また現在に至るまで、齋藤功教授のもと、矯正学分野でお世話になっていますが、形態を観察することや、何か一つでも結果を出してまとめるということは、矯正臨床を行う上でも役立っています。さらに、分野を超えた先生、先輩、後輩との交流は、今でも貴重な、かけがえのないものです。

大学院の4年生の秋には、同期のS君、留学生のNataliaと3人でアメリカはフロリダへ学会発表兼、卒業旅行に行きました。一体、人生で何回、卒業旅行に行けば気が済むのでしょうか。飛行機で空港上空からアメリカの大地が見えてくると、「アメリカ横断ウルトラクイズ」のテーマが頭の中を流れます。私たちは、マイアミでレンタカー

を借り、シュワちゃんの映画に出てくる「7マイルブリッジ」でキーウエストに渡りました。海辺の棧橋で、音楽が流れるなか、沈む夕日をテキーラ片手に見守る人々、とても良いムードです。翌日は、夕方にはフロリダに渡る予定でしたので、キーウエストでの観光時間はあまり多くありませんでした。それにも関わらず、翌日私とNataliaが目覚めたのは、なんとお昼過ぎでした。完全に時差ぼけです。S君は一人で付近を散策していたそうです。前田教授には、S君と私のロマンスのために、何かとご指導（作戦）を賜っていましたが、この旅で二人の破局？（始まってはいませんが）は決定的なものになりました。そんなS先生にも間もなく赤ちゃんが誕生します。お幸せにね。

大学院を卒業し2年後、大学院時代の経験を生かし、大学院生を連れ、アトランタでの国際学会に参加することになりました。乗り継ぎのためシカゴ空港に着くと、再びあのテーマ曲が頭の中を流れます。乗り継ぎ便は50分ほど遅れていて、搭

乗口にはポスターを抱えた人々もいました。私はちょっとお手洗いへ行きました。搭乗口へ戻りしばらく待っていると、搭乗口から制服の女性が出てきて、「ペラペラ、～、ファイナル アナウンスメント。」と言うやいなや、バタン！と分厚い扉を閉めました。「!?…??」、周囲を見ると、いつの間にかポスターを持った人もいません。そして、その扉は二度と開けてもらえず、飛行機が飛び立つのを見送ったのでした。何とか次の飛行機に乗せてもらえ、アトランタ空港に着くと、先に着いていた私たちのスーツケースが広いロビーにぼつんとありました。最終便でなくて本当に良かったです。

そんなこんなで、大学院時代の経験は私にとって、とても有意義なものでした。思い出話ばかりになりましたが、大学院のOBとして、大学院生のお役に立てることがあればと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

大学院の生活について

歯周診断・再建学分野 中川英蔵

興味があればまず入ってみて自分の身で感じる
ことが一番であると思います。

他人の経験はほとんど参考にはなりませんし、
どのようなスケジュールで生活するかも、どんな
結果を残すかも本人次第。「やれることをやれるだ
けやる」という毎日です。

この原稿も単なる一例に過ぎませんが、これま
での体験をお話したいと思います。

ヒトはどこから来てどこへ行くのか。時間を
出来るだけ遡れば起源が解り、それを折り返せば未
来も解るだろうという拙い直感から発生学を選
び、本籍歯周診断・再建学分野、現住所分化再生
制御学分野という形で研究がスタートしました。
初日はご挨拶程度と考えていましたが、椅子に座
るなり教授から「ES細胞から歯を作りたいんで
すよ、あまり時間がないので早速始めましょうか」
ということで直ぐに実験開始。「世界を驚かせよ
う」という目標のもと、それから24時間365日、
時間も曜日もなく実験漬けでした。

認識の狩人と真理の鉱夫。研究者はその二つに
分けられるような気がします。自分の師事した里
方教授は前者寄りであり、判断・行動のスピード、
仕事への誠実さは驚異的で、常に転換を迫られて
いる状態でした。小さな研究室が大きな研究室に
勝つにはどうしたら良いかということを中心に考
え、考えながら動き、動きながら考えるという毎
日は自分の価値観を大きく揺すり、新たな視座と
引出を増やすきっかけとなりました。そのような
生活から、研究とは、新規性、進歩性、施行可能
性を視野に入れながら、トライ&エラーを可能な
限りのスピードで無限に繰り返すことではないか
と思うようになり、目標も非常識なほど遠く高い
方が良いと感じています。ブレイクスルーの種は



そのような所に転がっているのではないでしょ
うか。

暗闇の中でその周囲が壁なのか扉なのかと叩き
続ける生活は非常に辛いものですが、研究の生活
はそれに似ており、偶然にもネズミ1匹通る程度
の穴からの光を見つけると非常に勇気づけられ、
それが自分なりのセレンディピティーと感
じることがあります。

ES細胞を用いての歯胚再生は想像以上に
ハードルが高く、問題が山積している状態ですが、
一連の実験の中で、生後の口蓋粘膜上皮細胞でも
歯となるシグナルを受け取る能力があることを発
見できたのは幸運でした。今後も臨床応用を意
識して創ることを念頭に、創るための仕組みの解
明にも力を注ぎたいと考えているところです。

新しいことに取り組む時の不安。しつこく付き
纏う不安と共存する心の強さと、不安を解決する
方法の引出を増やすこと、つまりは情念と理知と
のバランスを取りながら地金を磨いて展開力をつ
けるトレーニングが大学院生活の中でできるの
ではないかと思います。但し、目的を持って過ごし
た場合に限りませんが。

Otago 大学 Research day に参加して

大学院2年 青木 由香莉
(歯周診断再建学分野)

去る2009年3月26日、ニュージーランド Otago 大学で行われました Research day に口腔生命福祉学科 山崎教授と歯科総合診療部 中島先生と参加してきました。

Otago 大学はニュージーランドの南島の南端近くに位置するダニーデンという町にあります。このダニーデンはこぢんまりとした町ですが、町並みはスコットランド様式の白い石造りで美しく、海の向こう側にはもはや南極しかないところであり、さらには少し町をはずれば「ニュージーランド＝羊」という期待を裏切らない広大な自然が広がり、どこかのテレビでみたような羊の群れに遭遇することができます。Otago 大学が町の中心にあり、その周辺は学生街で、物価も安く治安もよく、非常に生活しやすそうな印象を受けました。

この Research day で、今回私が発表したのは、歯周病原細菌 *Porphyromonas gingivalis* 感染が冠動脈疾患リスクに及ぼす影響を歯周炎モデルマウスを用いて解析した結果です。歯周炎が冠動脈疾患のリスクの一因であるという疫学的報告は過去にいくつかありますが、歯周病原細菌がどのようなメカニズムで動脈硬化症

の発症・進展に関与しているかということをはっきりさせるため、私たちはマウスに *Porphyromonas gingivalis* を感染させて歯周炎モデルマウスを作製しました。このマウスの全身および局所の病態を解析した結果、血管や肝臓での遺伝子発現の変化が認められ、歯周炎が冠動脈疾患リスクを高めるとことがわかりました。現在もこのマウスを用いた研究は、私たち研究班が一丸となって継続して行っています。

では、Research day とはなにか？ ということですが、言ってしまうと新潟大学でいう「新潟歯学会」のようなものです。卒業年次の大学院生が一堂に会して、それぞれの研究を発表し、その中でも優秀な学生には賞が贈られます。またここでは、各国から著名な先生方を招待し講演が行われます。ミネソタから Mark C Herzberg (Journal of Dental Research の Editor-in-chief だった有名な先生です)、メルボルンから Mike Morgan、マレーシアから Rosnah Zain、そして日本から山崎先生が招かれ、非常に貴重な講演を聞くことができました。さらに、この Research day には J M がスポンサーとしてついており、ランチと演題終了時に



Otago 大学前で山崎先生と



発表終了後に Prof. Gregory J Seymour さんと

はビュッフェ形式で軽食が用意されているのですが、これが学生や教員が親睦を深めるのに非常によい機会となっていました。私もここに参加させていただいたのですが、コミュニケーションがもっと上手にとれればと何度思ったかわかりません。しかし、不自由な英語ながら、多くの大学院生とそれぞれの大学生活や研究について話すことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。

大学まして国が異なれば、生活スタイルや習慣、文化は当然ながら異なります。Otago 大学の歯学部は学部内および病院内も見学させていただいたのですが、診療スタイルも服装から違い、驚きました。しかし、そこには大学のシステム、学生教育のカリキュラム、診療報酬、国の政策、患者様である国民の理解、等々さまざまな要因が絡んでいます。Otago 大学のシステムで素晴らしいと感じたことはたくさんありますが、これがそのまま日本ですぐできることではないですし、逆に日本のよさも海外の大学を見ることで改めて感じることができました。大事なことは、実際に知る、ということだと思います。これは研究においても臨床においてもいえることだと思いますが、今ま

で自分の知らなかったことを、実際に自分の目で見、聞いて、そして考えることがいかに大切か、そこから多くのことを始めることができるということに改めて学びました。

海外の大学で学んでいる大学院生や先生方と話すことで、多くの人が様々な研究をしていてなんて世界は広いのだ、ということを実感することができます。しかし、研究に携わっていることで逆にとても近く感じることもできるのです。地球の反対側で、同じような研究を同じように頑張っている人がいるということを知るのには、非常に励まされることです。そういった新たな繋がりができたのが今回得られたものの中で最も嬉しいことでした。

毎日の研究や診療を行っているとな目の前の出来事に集中することが多く、それは大事なことです。ときにもっと遠くへ眼を向けることの大切さも今回学ぶことができました。このような機会がなければ知ることができなかつたと思います。大学院生や学部学生の交換留学などの、実際に体験できる機会がより増えることを期待します。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった諸先生方に心より感謝申し上げます。



英語での発表に緊張しました



各国の先生方との夕食会

あなたの Kenji 度チェック —新潟市とミシガン州アナーバー市での暮らし—

口腔解剖学・准教授 Kenji Izumi

6年半の間、アメリカミシガン州に在住していましたが、新潟大学に再び戻ってくることができました。長らくお会いしていなかった先生方や友人たちと再会することができましたし、赴任にあたり、お世話して頂いた先生方に大変感謝している次第であります。留学という、日本にある現在のポジションを残したまま半年とか、長くても3年くらいの期間海外に滞在し、また元の日本のポジションに戻ってくるというのが一般的なイメージでしょうか。実はこの手の滞在も、約2年間でしたがミシガン州アナーバー市という同じ街で12年前に経験しました。その時と根本的に違うのは、6年半のアメリカ滞在に不可欠なのは、日本のポジションを辞してアメリカのポジションに就くことです。こうなってしまうと、あと何ヶ月で日本に帰らなければならないという感覚は完全になくなり、アメリカ人の普通の生活に根ざして暮らしていかざるを得なくなります。するとどうでしょう、12年前のいわゆる留学では考えもつかなかったようなことを経験することになり、以前より客観的に新潟（日本）を見ることができるようになったと感じています。言い方を変えると、中途半端な日本人になったかもしれません。今回はそれを読者の皆様の Kenji 度と名付け、あなたの感覚がどのくらい Kenji 的かチェックしてみませんか。もちろん Kenji 的とは新潟（日本人）としてまずいことを意味しますのでご注意ください。あ、ちなみに私は現新潟県知事の出身高校の1学年下です。

海外に行くと、いわゆるカルチャーショックというのはどんな人でも多かれ少なかれ経験しますが、自分の国で普通に起きたり慣れ親しんでいることが、海外では全く通用しなかったり、あるいは

は起こり方が違うために面喰ってしまって、その大きなギャップによって居心地が悪くなる現象であるといえると思います。以下に私の独断で、随分日本と違うわな〜と感じる項目（システム、事象）を10個あげました。かつ、私なりの解説も付け加えました。これらは違う点を述べただけで、どちらが良いとか悪いとかいうことを記述している気持ちは毛頭ないですからこの点をご理解ください。

それではやり方です。Kenji が新潟とミシガン州で暮らしてみても“違う”と感じた10の項目に対して、もし、あなたが日本を離れてアメリカで暮らすことになったと仮定した時に、その違いがあなたにとって comfortable そうか、あるいは uncomfortable そうかを想像してみて以下のように1から10で順位をつけて頂きます。

その項目の日米ギャップが最も uncomfortable になりそうと思う項目には1をつけてください。逆に、この項目の日米ギャップは自分にとっては最も comfortable かもしれない、と思う項目には10をつけてください。

簡単にいえば、順位の1、2、3は、日本流の方が自分は好き、自分に合っている、アメリカ式は耐えられない。逆に8、9、10がつけられた項目は、アメリカ流の方が自分は好きかも、日本に住んでいてもコレは自分には馴染まないみたいな感覚でしょうか。

Kenji はすでに順位をつけました。次のページで私のつけた順位との差を計算してみましょう（差を計算して頂きますが、マイナス記号はつせず（差を計算して頂きますが、マイナス記号はつせず（差を計算して頂きますが、マイナス記号はつせず）にすべて正の数にしてください）。で、10個の順位差をすべて足し算してください。私と感覚が似ていればその差は小さいはずですよ。すなわちあ

あなたの感覚は新潟（日本）人離れしていて、ヤバイということになりますヨ。以下にちょっと説明を加えますが、私のコメントに惑わされないようにしてくださいね。もしだったら、項目だけ読んで説明を読まずにいきなり順位づけをして下さっても構いません。



科学研究費など外部資金の使い道 (あなたの順位)

最近の日本におけるグラント申請書のフォーマットは、7年以上前に私が経験していたフォーマットに比べるとアメリカ式になってきている、という変化は帰国後に気付きました。しかし、決定的な違いは、日本では自分の給与に反映できないということです。

見ず知らずの人へのあいさつ (あなたの順位)

例えばミシガン州ですと、自分が並んだスーパーのレジ係の担当とか、デパートのエレベーターの中で全然知らない客と会っても、基本的には“ハーイ”と言ってスマイルであいさつをかわしますね。最近は歯学部の学生さんも廊下ですれ違う時に、こんにちはと見ず知らずの私に声をかけて下さいますが、新潟ではデパートのエレベーターに笑顔で入っていくと、怪訝な顔をされるので、もうするのは止めました。

修理、電話設置等のサービスをうける場合の予約 (あなたの順位)

日本だと、何時に伺いますと言われると、ちゃんとその時間に来て下さいますが、ミシガン州の、例えば電気温水器の修理に来てほしいので予約したいと電話すると、何時という予約すらできず、午後1時から5時までの間に行くからということで、その時間ずっと待っていないといけません。

アメリカのスイーツ (あなたの順位)

パーティー好きなのでケーキを目にする機会は多いですが、甘すぎて味に上品さのかけらもありません。色もビビッドすぎます。スーパーでは平気で青い生クリームを使ったバースデーケーキが売られていて、ミシガン州の子供たちは無邪気においしいと言って食べていますが、食べ終わると舌とか唇が青くなって、おまえら気持ちワルイゼ。

個人債務（カード、住宅ローンなど） (あなたの順位)

一般的に言われていることとして、日本のローンはリコースローンと言われ、人を信用の対象にしますが、アメリカのローンはノンリコースローンと言い、モノ（不動産）を信用の対象にしますので、根本的に異なります。現実的な例をあげますと、日本にはコワモテな方々が借金の取り立てに来て、保証人までをも追っかけたりしますが、アメリカでは取り立て屋という職業が存在しません。

雨や雪の降り方 (あなたの順位)

ミシガン州アナーバーの緯度は日本でいう旭川市くらいなので、基本的に新潟市より寒いですが、多くはありませんが、トルネード警報が発令されることもあり、雨とか風で命の危険を感じます。雷雨の降り方もいわゆる日本のゲリラ豪雨に似ています。幸い平坦な州ですから、土石流とかの土砂災害はあまり聞きませんでした。

健康保険（医療保険）のシステム （あなたの順位 _____）

ご存知のようにアメリカは国民皆保険ではありません。オバマ大統領は日本のようなシステムにしようと公約しましたが、いまその政策が批判を浴びて支持率を落としていますよね。保険は自分で会社を選び、内容は毎年更新します。保険の種類と月々の掛け金の違いによって、カバーされる医療サービスが異なります。しかし医療費の高騰でアメリカ人の6人にひとりが医療保険に経済的理由で加入できていません。

会議の頻度、長さ、内容 （あなたの順位 _____）

一般的にミシガン大学内での“会議”の頻度は少なかったですが、1つの会議にかかる時間は2時間くらいでした。会議中 Kenji が1回も発言しなくてよかったというような会議は全くなく、メンバーとしての一体感がありました。ただ、まったく議題と関係ない話題で脱線されるのは苦痛でした。

飛行機の機内サービス （あなたの順位 _____）

飛行機会社によらず、アメリカの飛行機会社の機内サービスは日本の飛行機会社のそれより圧倒的にぞんざいです。デトロイト空港がハブだったので、今はデルタに吸収されたノースウェスト航空が Kenji のお得意さんでした。ノースウーストと言われていましたね。事情により本帰国はシカゴから JAL を使いましたが、CA はみなさん天使のようでした。（若くてきれいであったということ差し引いたとしてもです）

おみやげの習慣 （あなたの順位 _____）

アメリカ人はよく長期間の旅行に行きますが、アメリカ人から旅行先のおみやげをもらったことはありません。

では下表であなたの順位を記入して、計算して、Kenji 度をチェックしてみましょう。

日米ギャップ	あなたの順位	Kenji の順位	差(マイナスはつけないで)
研究資金の使い道		9	
あいさつ		8	
電気工事の予約		3	
スイーツ		2	
個人債務		10	
雨や雪		4	
健康保険		5	
会議		6	
機内サービス		1	
おみやげ		7	

差の合計→

- 40点以上 Kenji の感覚とのギャップが十分にあります。これからも新潟（日本）に貢献してください。
- 20～38点 あなたはバランスのとれた感覚の持ち主です。
- 2～18点 Kenji 似です。この結果は他の方々には黙っていた方が無難ですヨ。
- 0点 あなたは正真正銘の、理屈っぽい、頑固者です。

歯学部運動会を終えて

歯学科5年 細川 翔太

6月6日、土曜日、今年も無事に歯学部運動会を行うことが出来ました。駐車場となってしまった今は無き旭町グラウンドから場所を代え、附属小学校のグラウンドをお借りしての運動会となりました。

例年より遅い開催のために天気が心配されましたが、やはり新潟。期待通り朝起きて目を澄ませば不穏なサウンド、窓の外を見れば降りしきる雨とずぶぬれの洗濯物、携帯電話を見れば運動会の開催を心配するクラスメイトからの着信履歴とメールの山。急いで学務係りと相談した結果、雨は止むと強引に判断し、雨の中運動会の準備を行っていたら、そうこうしている間に雨も止み、次第に晴れの様相。

晴れ間が見えた10時に開会式で運動会スタート。学年対抗や部活対抗での玉入れやドッジボール、借り物競争にパン食い競争、玉送りや15人16脚、最後は20人リレーで16時に幕を閉じました。快晴とはいかないまでも陽気な太陽の下、例年以上に本当に白熱した競技ばかりでした。参加して

くれた学生の皆さん、競技にまで参加していただいた多くの先生方、多くの相談にのってくれた去年のチーフの方々、色々迷惑をかけた山村先生や学務係の皆さん、そして不慣れで何にもわからない実行委員長に従って本当に忙しいなか係の仕事最後までしてくれたクラスの仲間には感謝してもしきれません。

歯学部運動会はクラスがひとつにまとまる数少ない機会です。普段授業でしか見ないあの人の普段と違う顔を見れる場所です。そして本当に楽しいイベントです。この楽しさをより多くの人に知って欲しいというのが運動会を終えた今でも僕の願いのひとつです。そして来年こそは口腔生命福祉学科の皆さんがもっと参加しやすいものになればいいなと思っています。

最後になりましたが実行委員長をやらせていただき本当にありがとうございました。今回の運動会が、皆さんの思い出のひとつにしてもらえたら幸いです。

合格おめでとう

第102回歯科医師国家試験合格者名簿

池田 峻	石坂 淳子	井表 千馨	大川 ゆり絵	大墨 竜也
小川 信	奥村 紀子	慶伊 伸彦	小出 洋子	笹 なつき
塩見 晶	滝沢 可奈子	竹花 快恵	西 奈津実	西尾 絵梨香
野澤 恩美	藤井 裕美	藤田 理雅	堀水 慎	増淵 尚子
松島 綾子	丸山 緑子	水木 麗奈	宮崎 真幸	宮沢 春菜
村上 大悟	村田 勝幸	大瀧 真太郎	金子 貴紀	近藤 由記
斎藤 浩太郎	作間 健彦	白金 由紀子	杉山 達也	寺島 綾美
出口 泰樹	平野 大輔	峯村 周	本宮 里佳子	好川 守
渡部 平馬	笠間 美樹	山村 伸一	稲田 達哉	神村 章平
川瀬 那奈	内藤 俊幸	長谷川 友美		

第18回歯科衛生士合格者名簿

安斎 さや香	石山 友香里	市居 まり子	大橋 薫	大橋 乃梨子
金井 彩花	菅家 ちあき	當摩 紗衣	中田 悠	鳴沢 佑香
比護 彩美	丸山 加奈子	三原 愛子	吉田 光希	角田 真理子
篠田 茉有子	横塚 あゆ子	夏目 里美	江部 由佳梨	佐藤 舞

第21回社会福祉士合格者名簿

安斎 さや香	石山 友香里	市居 まり子	大橋 薫	大橋 乃梨子
金井 彩花	菅家 ちあき	當摩 紗衣	中田 悠	鳴沢 佑香
比護 彩美	丸山 加奈子	三原 愛子	吉田 光希	角田 真理子
篠田 茉有子	横塚 あゆ子	江部 由佳梨	佐藤 舞	明田 弥生
今井 千鶴	大坪 美香	南部 友貴	長谷川 尚郁	福田 美陽
松本 愛子	溝口 奈菜			

教授に就任して



歯科総合診療部の 教授に就任して

藤井規孝

この度、平成21年4月1日より医歯学総合病院 歯科総合診療部の部長を拝命致しました藤井です。前任の魚島先生（現・生体歯科補綴学分野教授）はこれまでに何度かこの歯学部ニュースに寄稿しておられましたので、病院組織ですが歯科総合診療部についてご存じの方も少なからずいらっしゃるかと思います。しかしながら、せっかくこのような機会を与えて頂きましたので、自己紹介の後、改めまして歯科総合診療部のご紹介と私が考える今後の展望についてまとめてみようと思います。

まずは自己紹介ですが、私は平成5年に新潟大学歯学部を卒業し、そのまま新潟大学歯学部歯学研究科（大学院）へ進みました。所属講座は当時の歯科補綴学第二講座で、大学院では口腔解剖学第二講座にお世話になり、歯科インプラントに関する組織学的な研究を行いました。他の先生方の例に漏れず、たくさんの貴重な経験をさせて頂いて大学院を修了した後に半年間、学外の病院に勤務させて頂きました。その後、再び大学に戻り、平成16年まで第二補綴で医員、助手を務めました。そして、研修医必修化を2年後に控えたこの年に歯科総合診療部へ異動し、現在に至っております。これまでのことを振り返ってみると、周りにはいつも頼りになる先輩・後輩の先生方や職員の方がいてくれたように思います。このことを考えると今更ながらたくさんの方々に感謝する気持ちでいっぱいになります。ここで、大学院進学を決め、所属講座を選択する際に思ったことについて少し触れさせて頂きたいと思います。最も大きかった

のは、やはり臨床実習のインストラクターの先生方の影響を受けたことでした。当時学生だった私に付き合っただけで夜遅くまでいろいろご指導下さり、相談にのって下さった先生方を見て、自分もいつかそうなりたいと憧れたことを思い出します。臨床実習中の学生にとって、インストラクターと呼ばれる教員の先生方は最も信頼、尊敬することのできる存在だと思います。目の前に患者さまがいらっしゃるという状況で自分がうまくできないことや至らない点をフォローして下さるインストラクターの先生をみてこのような気持ちを抱く学生は今でも決して少なくはないように思います。現在、臨床実習のインストラクターを務めていらっしゃる先生方もこのような先生ばかりであると信じています。

少し脱線気味になってしまいましたが、次に歯科総合診療部の紹介をさせていただきます。当部は上述した学生の臨床実習のマネジメントと歯学部卒業後に研修歯科医の先生方が行う臨床研修の管理・運営・実践を担当しており、臨床教育を専門としている部署です。新潟大学歯学部の臨床実習、臨床研修には学生あるいは研修歯科医が実際に担当医として歯科治療を行う診療参加・実践型で行われているという大きな特徴があります。全国の国公立大学をみても、このような形態で臨床実習、研修を行っている大学は希な部類に入ります。超高齢化や長引く不況など、年々複雑化する社会情勢を受けて、大学病院を受診される患者さまのニーズも段々高くなってきていることが原因の一つであると考えられますが、大学病院を

信頼して受診される患者さまに対して、治療の質を担保しながら学生、研修歯科医の臨床教育にご協力をお願いできる環境が新潟大学歯学部には備わっており、なによりも新潟大学病院を受診される患者さまにご理解があつてこそこのような実習、研修は成り立つものと思っております。また、歯科総合診療部のもう一つの役割として予診業務が挙げられます。予診とは、初めて大学病院を受診された方に対して最初にお話を伺い、お口の中を拝見して大学病院歯科の中にくつもある専門診療科のうち、どの科が治療にふさわしいかを判断（予め診断）する場所です。臨床実習、研修中の学生、研修歯科医もこの予診業務に携わっているため、彼らにとっては何が原因でどのような症状が出現し、その結果患者さまはどのようにお困りなのか？を瞬間的に判断する（絞り込む）ことを学ぶことのできる大変貴重な場であると言い換えることができます。

続いて、今後の歯科総合診療部の在り方、展望について理想も含めて思うところをいくつか書かせて頂きます。

①臨床実習・臨床研修の充実について

歯科医師は理論的に構築されたカリキュラムによって育てられるべきだと思います。しかし、従来から言われている徒弟制度的な要素も必要だと思います。そこに上手な先生がいれば、その先生の真似をすることから技術の習得が始まることも確かにあります。また、これまで知識、技術に対して遅れがちといわれてきた態度の教育は身近に真摯に歯科医療に取り組み、親切で丁寧な先生がいることが最も勉強になるのかもしれない。さらに、学生や研修歯科医自身が担当医の一人あるいは担当医として直接患者さまに向き合うことが実習、研修修了後の彼らに大きく影響すると思います。もう一つ付け加えると実際に担当医として患者さまと対面した時には、予診業務の紹介の行で触れたように、何が原因で根本的に問題を解決するためにはどこを治さなければならないのか？を常に意識する必要が生じます。何事についても同じですが、ほとんどすべての現象には必ず原因と結果があり、原因と結果の間にはなんらかの因果関係が成立するという考え方に大きな間違

いがないのであれば、これを歯科治療に当てはめ、原因を探る習慣を身につけることが臨床実習、研修の大きな目的ではないだろうかと思っております。さらに、このような姿勢は歯科医師のみならず大学に歯科学に関連する研究者や教育者にとっても必須であり、良質な歯科医師だけではなく、優秀な研究者や熱心な教育者を輩出することを求められる歯学部にとって欠かすことのできない大変重要なものであると考えています。

現在、新潟大学歯学部では幸いにも非常に貴重な臨床実習、臨床研修を行うことができっております。しかし、今後もよりよいシステムを模索し、学生、研修歯科医、患者さますべての見地に立って改善する努力を続けることが必要であり、臨床教育を通じて上記の目的を達成することが歯科総合診療部に課せられた命題の一つであると考えております。

②研究について

現在、歯科医師臨床研修が必修化されてから4年目に入っています。歯科における臨床教育に関しては様々な学会やセミナー等で報告、検討され、各大学ともよりよい臨床教育システムの開発に取り組んでいるようです。新潟大学歯学部には、診療参加・実践型という現状において簡単に他大学が真似ることのできない体制が確立されつつあり、これまでも何度か本学の臨床教育の現状を報告してきました。今後もこれに胡座をかくことなく現在のシステムをさらに発展させ、それらを逐次報告していくことができると考えております。臨床教育に関する研究はそれぞれの機関がさまざまな体制で行っているため、統一的な見解を求めることは難しいかもしれません。しかし、質の高い歯科医師を育成するという目的はどこも同じはずで、効果的な臨床教育方法について他大学の先生方との情報交換等を積極的に行い、参考になる点があれば新潟大学がこれまで培ってきた臨床教育方法に取り込むような柔軟性も持ち合わせていたいと思います。

最後になりますが、歯科総合診療部の学内・院内での業務は他分野や診療部の先生方のお力添え無くしては成り立ち得ません。また、先に申しあげましたように歯科総合診療部は病院に属する組

織であり、その歴史も比較的浅い部類に入ります。さらには、私自身まだまだ勉強しなければならないことが山積しており、至らない点が多々あることも十分承知しているつもりです。これらのことをしっかり念頭において、今後学内の先生方、職

員の方々、また各方面関係者の方々にご指導頂きながら、少しでも新潟大学歯学部の方力になれるようがんばって行きたいと考えております。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



口腔生理学分野の 教授に就任して

医歯学系・教授
(口腔生理学分野) 山 村 健 介

1. はじめに

このたび、平成21年4月1日付けで、現新潟大学副学長である山田好秋先生の後任として、口腔生理学分野の教授に就任しました山村健介と申します。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私は平成2年3月に20期生として新潟大学歯学部を卒業し、大学院生として当時の口腔生理学講座（現口腔生理学分野）に入学しました。大学院時代の研究テーマは「歯根膜入力が呼吸活動に及ぼす影響について」というもので、入学当時口腔生理学講座の教授であられた島田久八郎先生、島田先生ご退官後、教授として赴任された山田好秋先生のご指導のもと平成6年に大学院を修了しました。大学院修了後も山田先生に研究を続ける機会を与えていただき、平成6年から1年間を研究生、平成7年～18年は助手、平成18年～21年は助教授（現准教授）、そして現在とずっと新潟大学口腔生理学分野のお世話になり続けています。その間スタッフが少ない中、山田先生に後押ししていただき、平成9年～平成11年の2年間と平成12～13年の2ヶ月間、カナダ・トロント大学口腔生理学講座のBarry Sessle先生の研究室で「咀嚼運動制御における大脳皮質の役割」に関する研究をさせていただきました。これまで良き師、良き先輩、良き仲間恵まれ、教育・研究の両面において、私自身の能力と言うよりは、多くの人に支えられ、励まされ、啓発されてきたから現在があるのかな、と思っています。

今回は「教授に就任して」というタイトルでの原稿依頼ですので、教育・研究についてのこれからの抱負を書きたいと思います。

2. 教育

生理学は、身体のもつさまざまな機能の法則や意義、全身の機能との関連を明らかにする学問です。私なりの解釈では、全ての生物に共通な「生きるしくみ」の基本原則をふまえた上で、もっと具体的な個々の生命現象についてその基本原則をあてはめて、共通性と特殊性を探るような学問だと思っています。そこには個体の構成要素である個々の細胞を見つめるミクロ的な視点と、個体全体を包括的に捉えるマクロ的な視点の両方が必要です。生理学を学ぶことによって生命現象を観察する上での「ある種の哲学」あるいは「基本的なひな型」が得ることができます。すなわち、何か新しい現象と出会ったときに、その現象を分析・評価する目が養われます。このような能力は、患者さんの病態を理解し、生物学的な知識をもって包括的かつ先進的な歯科医療を提供できる歯科医師を育成する上で不可欠であると考えています。

生理学の教育では細かな知識をつめこむのではなく、生理学の基本となる内容を臨床歯科医学や他の基礎学問領域とどのように関連しているかを含めて具体的にわかりやすく学生に伝えることを心がけたいと思っています。そして、学生が講義によって得た知識を活用しながら自ら考え、仲間議論し、他者に伝えるような問題解決型の学習の場を設けたいと思います。これにより歯科医師に不可欠な「患者さんが納得できる説明をする能力」「他人とコミュニケーションをとる能力」を養うことができると考えています。同時に、歯科医学や生命科学には、未解決の学問的課題が多く残っていること、社会に貢献するような医学の発展は、基礎、臨床を問わず地道な研究活動に支え

られていることを学生さんに伝え、リサーチマインドをもった学生さんを育成できればと考えています。そのためには、私自身が積極的に学生に接し、教育や研究を楽しみ、これらに熱意をもって臨んでいる姿勢を学生に見せ続けることが何よりも大切であると思っています。大学院生には私の持っている生理学的な知識、技術だけではなく、社会あるいは学術的に価値が高く、妥当かつ検証可能で、焦点のしぼれた仮説を作ることの重要性を伝えることができればと考えています。このためには、自分自身の研究の質を高めることが、教育内容の向上につながることを肝に銘じていきたいと思っています。

3. 研究

近年の分子・細胞生物学研究分野の進歩は目覚ましく、これまで未知であった口腔に関連する機能分子が次々と同定されていますが、それらの知見を口腔機能、ひいては生命活動へと統合する役割を果たすのが口腔生理学であり、今後微視的・分子論的研究が進歩すればするほど、これらを統合し生体を有機的に捉える研究が重要になってくると考えています。同時に研究によって得られた知見を社会に還元する姿勢も今後基礎研究をする者に課せられた使命であると思っています。

私自身がこれまで行ってきた覚醒動物を用いた実験系に加え、最近私たちの教室で開発したヒトを用いた咽喉頭領域の電気刺激による嚥下誘発の実験系を用いて、咀嚼・嚥下運動の神経制御機構の解明を目指した研究をさらに推し進めていこうと考えています。具体的には以下の通りです。

1) 覚醒動物を用いた咀嚼・嚥下運動の神経制御機構の解明

咀嚼・嚥下運動は消化・吸収の第一段階で、取り込んだ食物を機械的に粉砕することに加え、食塊を消化液（唾液）と混和し、次の器官での消化・吸収に適した性状にした上で移送するという複数の作業が連続性をもって行われる運動です。この機能は自律神経系により不随意的に制御される食道以降の消化管で行われる消化・吸収過程と本質的に同一ではありませんが、その制御が体性神経系によって行われること、そこに随意的な制御が加

わることが大きな特徴です。私たちが現在行っている覚醒動物を用いた実験系を用いて咀嚼・嚥下の神経機構の研究を行っている研究室は世界的にも少ないため、その利点を生かし、麻酔下の咀嚼モデル動物では研究が難しい口腔内での食物の移送機能の制御メカニズムと、大脳皮質をはじめとした高位脳による随意的制御がどのように関与しているかの解明に重点を置きたいと考えています。

2) ヒトを用いた嚥下誘発の神経制御機構の解明と社会への還元

嚥下機能障害をもつ患者さんの増加が社会的な問題となっている今、私たち基礎研究者も社会に早い段階で還元できる研究をすべきだと考えています。現在、ヒトを用いて嚥下反射の促進因子・抑制因子の解明、例えば意識レベルが反射に及ぼす影響や、味覚刺激など口腔への刺激が反射に及ぼす影響などを味の素との共同研究で調べています。寝たきり高齢者の嚥下機能障害が社会問題となっていますが、意識レベルと嚥下反射の関連や味覚など末梢入力による嚥下誘発の促進・抑制のメカニズムが明らかになれば、嚥下機能リハビリの手技や嚥下補助食品の開発・改善に寄与すると考えています。

3) 咀嚼・嚥下感覚の認知機構

「食べる幸せ」は、個体が「摂取した食物を好ましいと判断し、プランした通り円滑に咀嚼・嚥下運動が遂行されたことを認知できた」ときに感じるというのが私の仮説です。この認知過程では感覚情報処理、運動のプランニング、個体それぞれの持つ記憶などに関わる脳部位で情報が双方向的にやりとりされます。このメカニズムを明らかにするには、大脳皮質活動を俯瞰的に捉える手法が必要となりますが、f-NIRS（近赤外光トポグラフィ）は有力な方法だと考えています。「食べる幸せ」を感じるメカニズムを解明し、社会に発信することが私の夢です。

4. 終わりに

先にも書きましたが、私自身は多くの人と出会い、その人たちとのコミュニケーションを通じて多くのことを学び、その人たちに支えられ、励ま

されて成長したタイプの間人です。これからも人との出会いを大切に、少しでも成長し、本学、そして社会に貢献できたらと考えています。たくさ

んの出会いの場とすべく口腔生理学分野の扉はいつも広く開けておくつもりです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

包括歯科補綴学分野の将来展望

包括歯科補綴学分野教授 野村修一



包括歯科補綴学分野は、補綴系分野の再編成を経て、研究面ではこれまでの基盤的な歯科補綴学の更なる展開を目指し、教育・診療面では有床義歯学・義歯

(入れ歯) 診療室を担当する分野として新たに発足しました。補綴系分野は河野教授のご退任後に後任教授が補充されないままとなっていました。臨床歯学の根幹をなす補綴系分野の研究・教育・診療を活性化するためには専任教授2名による体制が必須であると、魚島教授が主宰する生体歯科補綴学分野と共に平成20年7月にスタートしました。

ここでは、研究と臨床教育について今後の展望を述べたいと思います。

1. 研究について

超高齢化社会を迎え、顎口腔系における向老期からの加齢に伴う変化の解明と、高齢患者様への対応の確立は歯科医学全分野における課題です。

高齢者といっても、日常生活に全く不自由のない人から全身の病期や後遺症によって支援や介護が必要な人まで大きな個人差があります。個人差が大きい高齢者の特性に対応したオーダーメイドな補綴歯科治療が求められています。とくに現在、向老期にある「団塊世代」はこれまでになく多様性に富むことから、歯科治療に対する患者様からのニーズに答えるためには、補綴歯科治療における選択肢の拡大を図る必要があります。

そこで、当分野では図に示すような基盤的な歯科補綴学を発展させる多面的な研究を展開し、健常高齢者のみならず要介護・要支援高齢者に対して、補綴治療が与える身体的、心理的、栄養学的、

社会的なインパクトを示す evidence の蓄積を目指しています。

加齢に伴い口腔組織の抵抗力が低下する老年期では、歯の破折、根面ウ蝕、2次ウ蝕が多く、修復物のメンテナンスが難しくなります。さらに歯の老化に、有床義歯では支持組織の主体である顎堤組織の加齢変化や、唾液分泌量の低下が加わるため、顎口腔の機能を長期的に保持することが難しくなってきます。また、全身の疾患や障害、口腔内の老化に対応できる補綴歯科治療法を見直していく必要があります。

その一例を紹介します。手指の感覚や口腔内の感覚が低下した高齢者、片麻痺やリ्यूマチなどで手指が動かしにくい要介護高齢者では、義歯を安全に、容易に装着し、取り外すことができないために、義歯の装着率が低下し、よく咀嚼できない現状があります。そこで、要介護高齢者が安全で容易に義歯を着脱できる補助具を考案しました。

2. 臨床教育について

補綴歯科治療は歯科治療の中でも「技能」との関連が深いことから、技能教育の効率化を図りたいと考えています。歯科医学教育は認知領域（知識）のみならず、精神運動領域（技能）の占める割合が大きいのが特徴です。しかし、近年の社会情勢の変化によって、歯科医学教育の中核を占める診療参加型臨床教育の実施にはさまざまな困難が生じています。カリキュラム時間数の減少、教員定員の削減、診療参加型臨床教育に適した症例の減少などによって、診療を行う学生のみならず指導教員側の負担も大きくなっています。効率的で実効性のある教育システムへの転換が急務と考えています。



補助具を用いた義歯の装着

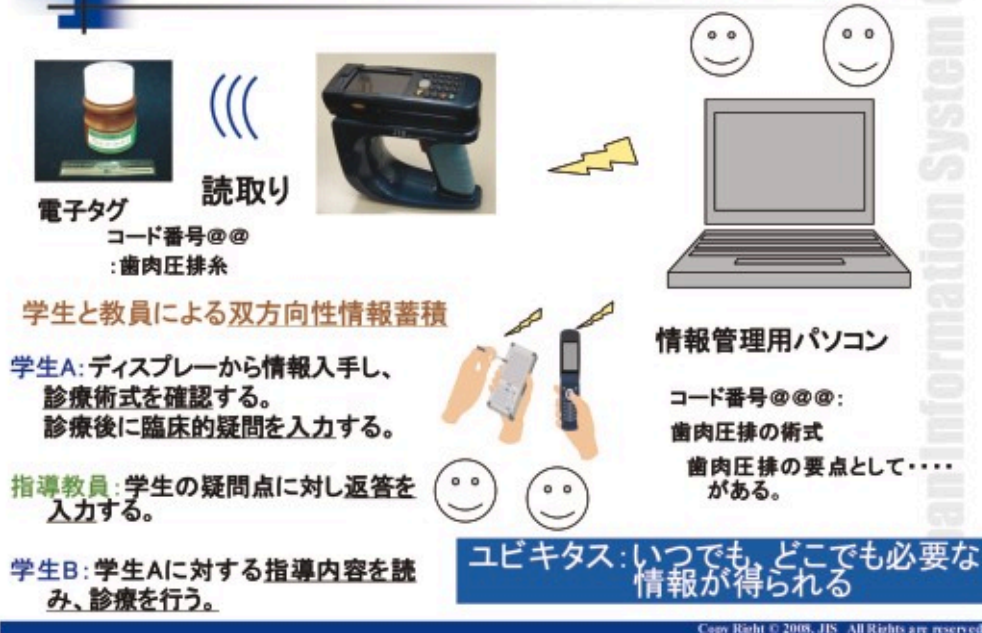


補助具を用いた義歯の取り外し

歯科診療、とりわけ補綴歯科治療では多種類の器具と材料を用いて症例に応じた術式が求められるため、学生自らが治療する診療参加型臨床実習の場では、事前に勉強していても、その知識を統合し、適切に診療技能を発揮することは容易では

ありません。また、指導教員がチェーサイドで実際に行ってみせて指導した情報が学生と教員との間に留まることが多く、別の学生に同じ指導内容を繰り返すことも指導教員の負担を大きくしています。

ユビキタスネットワークを応用した臨床教育



そこで、「いつでも」「どこでも」必要な情報を現場で得られるユビキタスネットワークを活用して、学生や臨床研修医が診療の現場で器具・材料の使用法や術式の留意点などの情報を再確認できる新しい臨床教育方式を構築することは、的確、安全な診療が可能となり歯科医療サービスが向上するのみならず、指導教員の負担軽減につながると考えています。

ユビキタスネットワークの切り札である電子タグはICチップとアンテナから構成され、電子タグは超小型ながら数キロバイトの記憶容量があります。器具や材料に貼付した電子タグの情報は、読み取り器を介してパソコン画面に表示されます。

図に示すよう、学生や臨床研修医は診療の現場で治療術式の流れや留意点、器具・材料の使用法などの情報を再確認して、この情報を参考に治療を行います。治療後にパソコンからの情報の有効性、治療中に直面した疑問点や治療後の疑問点、あるいは追加を要望する情報などを入力します。指導教員は学生からの入力情報を整理し、必要に

応じて追加修正することで、他の学生への診療指導に反映させることができます。このように、臨床教育に関する情報が学生と教員との双方向性に蓄積される特色があり、学生や臨床研修医が体験した臨床的疑問、うまく行かなかった術式などを抽出できるので、効率的な診療指導が可能となり指導教員の負担を軽減することができます。

この臨床教育システムは、ITを活用した教育改善を診療参加型臨床教育において多大な時間と労力を占めている歯科補綴学に導入するものですが、歯科補綴学のみならず歯科医学臨床教育全般に適用できるものと考えています。

3. 終わりに

当分野の医局員は全員が摂食機能再建学分野から移行しましたが、心機一転はりきって研究、教育、診療に励んでいます。その結果は外部資金の獲得にも現れ始めています。平成21年度科学研究費補助金費では新規に2課題が採択され、継続と合計して5課題となりました。さらに、科学技術振興機構(JST)シーズ発掘試験研究と、新潟大

学プロジェクト推進経費（奨励研究）にそれぞれ1課題が採択されました。診療面では、目標とした平成20年度外来患者数13,000人を超え、医局員数が減ったにもかかわらず平成19年度を上回ることができました。

最後に、これからも新潟大学歯科補綴学ブランドの確立に向け、医局員一丸となって元気に頑張るつもりですので、皆様のご支援とご指導を宜しくお願い致します。

生体歯科補綴学分野

生体歯科補綴学分野教授 魚 島 勝 美

1. はじめに

本学の歯科補綴学は過去に歯科補綴学第1講座、歯科補綴学第2講座の2講座が担当し、それぞれ教育研究臨床面で有床義歯とクラウンブリッジを担当していました。このうち歯科補綴学第2講座は当初田端教授、その後故草刈教授がご担当され、後に野村教授がご担当される際に大学院の部局化に伴って加齢・高齢者歯科学分野と改称されました。さらに平成20年6月、私がそれまでの歯科総合診療部から異動したのに伴い、平成20年7月をもって生体歯科補綴学分野と改称させていただきました。ただし、先の教授就任のご挨拶で書かせていただきましたように、厳密には旧第1、第2補綴をそのまま引き継いだわけではなく、新たに補綴学担当の分野を2つ立ち上げ、そのうちのひとつを私が担当させていただくという形をとっております。教育面では終始一貫クラウンブリッジを担当しておりますので、非常に分かりやすくして申し訳ありませんが、この経緯については前稿をご参照下さい。それでは、この新たに立ち上げられた生体歯科補綴学分野が現在何をし、どこを目標に活動しているかを簡単にご紹介させていただきます。

2. 教育

我々歯科医師の集団にとって、教育をいかに充実させるかは本当に大切な課題です。個人や学部といった単位ではなく、分野と言う単位でもこれは同様だと考えています。現在当分野が担当する講義・実習等は3年生の歯形彫刻、4年生の歯冠修復学と欠損補綴学の一部、5年生の総合模型実習の一部とポリクリの一部です。この他にも教員個人が分担する科目は多くありますが、そのいず

れでも歯学部学生の皆さんに歯科医療の大切さ、特に補綴学的見地からの治療のあり方等について、全力で伝える努力をしていきたいと考えています。

3. 臨床

補綴といえば治療です。機能回復の最終段階を担う分野としては、世界中どこに行っても誇れる治療を提供する集団になりたいと思っています。最高のクラウン、最高のブリッジを提供するだけでなく、患者様ごとにインプラントを含めた総合的な歯科治療のゴールをしっかりと見極めた医療を展開したいと思っています。

4. 研究

生体歯科補綴学という分野名には、若干の違和感があるかもしれません。今までは補綴と生体との間にかかなりの距離があるかのようなイメージがあったからです。しかしながら、補綴学的な治療内容といえども、そこには何らかの生体内での反応が惹起されることに例外はほとんど無く、これらを良く理解し、コントロールするためには生体のメカニズムを明らかにすることが不可欠です。我々は基礎研究者にはなれませんが、基礎を理解する研究者、基礎を理解する臨床家にはなれるはずです。幸いにして、当分野にはこれからのこういった研究を担うことができる優秀なスタッフが揃っています。インプラントに関する基礎的研究も含めて、患者様のメリットに繋がる研究を数多くしていきたいと考えています。

5. スタッフ

平成21年8月現在、当分野には教員8名、大学院学生5名、医員2名、レジデント1名、研修医

4名が所属しております。クラウンブリッジという非常に重要な分野の教育臨床研究を担当するには甚だ不十分なスタッフ数とは言え、分野発足以降多くの医局員が睡眠時間さえ削りながら必死に頑張っております。

富塚准教授は東京医科歯科大学歯学部を卒業後直ちに大学院に入学し、デンタルインプラントに関する研究をしてきました。その後、東京大学医学部口腔外科学教室で助手、講師を歴任し、平成19年6月に旧第2補綴の准教授に着任しました。デンタルインプラント周囲軟組織の新たなマネージメントに関する研究を行っています。また、現在は当分野の総括医長としても活躍する傍ら、クラウンブリッジ基礎実習およびポリクリのチーフインストラクターもしています。約7年前に第2補綴の大学院を修了した北村先生は、3次元有限要素法という、立体的な力の分散に関するコンピューターシミュレーションの研究をテーマとし、現在助教として主に教育臨床に携わり、早期臨床実習のとりまとめを行っています。また、かづきれいこ氏によるリハビリメイクにも積極的に参画しています。同じく助教の秋葉先生は、東北大学歯学部出身で、大学院修了後、同大学での活動を経て4年間に亘るアメリカでの留学生活を送ってきました。この間、脳における遺伝子発現制御に関連する研究を行い、平成21年4月に当分野に着任した新(旧)人です。現在、真夜中に大学で会えるのは大学院生か技工士の岡田先生か秋葉先生です。今年4月に着任した助教にはもう1人、加来先生がいます。彼は医科歯科大学出身ですが、不幸なことに彼の医科歯科大学大学院学生時代の指導教員が私でした。大学院修了後には直ちにアメリカに留学し、コラーゲンの生化学や力が細胞レベルで生体に及ぼす影響についての研究を5年間行ってきました。現在は秋葉先生と共に細胞生物学的研究全般について斬新な発想で研究の突破口を築きつつあるところ です。田口助教は本学出身で、解剖で前田先生にお世話になって学位を取得しています。現在では教育、臨床の中心的存在で、臨床実習のインストラクターとして熱

心な指導に定評があるばかりでなく、3年生の歯形彫刻実習のチーフインストラクターをしています。本学出身で平成18年度に大学院を修了した吉田先生はインプラント治療部の医員等を経て平成20年9月より助教に着任しました。私が新潟に来て初めて直接指導した大学院生で、そのテーマは骨に対する熱の影響の検索でしたが、本年4月より1年間の予定でアメリカのノースカロライナ大学歯学部留学中で、同じく骨を題材に分子生物学的手法を用いた基礎研究に従事しています。岡田先生は旧技工士学校の教官でしたが、同校の廃止に伴い大学院に配置換えとなって当分野の助教となりました。技工士にとっての臨床は、実際の患者様の技工であり、現在当分野の外来である義歯(冠・ブリッジ)診療室の技工を引き受けています。一方ではあらゆる学生基礎実習にインストラクターとして参加しており、その結果前述の通り大学に住んでいるのでは?とも思えるほどの滞在時間を誇って(?)います。

大学院4年生の川崎先生は、2年間の研修医を終えた後、野村先生ご指導の下に研究するために大学院に入学しました。その研究テーマは運動制限のある方の義歯の着脱補助具の開発と有効性検証です。補助具の作製等については岡田先生も研究に加わっています。現在ではこの他にデンタルインプラントに関する臨床疫学調査、金属アレルギーに関する研究、細胞生物学的基礎研究と、多方面に興味を持って研究活動を活発に行っています。3年生の長澤先生も2年間の研修医を経て大学院に入学しました。入学当初は指導教員である私が歯科総合診療部の所属でしたので、活動の拠点は総診でしたが、昨年秋より当分野に移って、現在はデンタルインプラント周囲の骨が、咬合力負荷によってどのように変化するかを動物実験により組織学的に研究しています。また、自身が歯学部学生時代に参加したSCRIP(過去の歯学部ニュース参照)に関する現役学生の面倒を積極的に見ています。徹夜も厭わない体力が自慢です。2年生のマルセロ先生はボリビアからの国費留学生で、現在は加来先生に指導を仰ぎながら、基礎

研究に従事しています。非常に勉強熱心ですが、生活のパターンが地球の反対側の母国時間に依存しているようで、昼と夜が反対になっているのでは？ と思うことがしばしばあります。1年生の高野先生は昨年当分野所属の研修医で、半年間は協力型研修施設に出向していました。今年度から大学院に入学した新進気鋭の若手です。現在は私の治療の手伝いをしながら、医局の雑務、自身の研究、実験をしています。大学には遅くまで残って仕事をすることが多いのですが、夜中はほとんど技工室で私の技工をやっていると思われ、その姿を見ることは比較的稀です。最近長澤先輩の動物実験に朝方まで付き合っ（付き合わされて）仮死状態になることもあったようです。同じく1年生のアルアミン先生は、昨年10月に大学院に入学した、バングラディッシュからの私費留学生です。デンタルインプラントの研究を希望して来日しましたが、やはり私費での日本滞在は厳しいようです。秋葉先生の指導の下で頑張っています。

川岸先生は、大学院修了後1年弱の関連病院勤務を経て、現在は当分野の医員として主に外来診療をしています。大学院時代には解剖の大島先生にお世話になりました。今年の3月、すなわち平成20年度で大学院を修了し、学位を取得した奥村先生も、当分野の医員ですが、同時に顎関節治療部での治療も積極的に行っています。新潟大学歯学総合病院では他大学には無い、3年コースのレジデント制度が設けられています。現在は2名がこのコースに所属して研修を行っていますが、そのうちの1人が深井先生です。今年の4月から

12月までの9ヶ月間、当分野の診療室で臨床の訓練をします。来年からは口腔外科にて研修の予定です。

当分野所属の1年目研修医は井田先生、山田先生、石坂先生、笠間先生の合計4名で、このうち石坂先生と笠間先生は現在協力型研修施設に出向中です。10月からは、現在当分野で研修中の井田先生、山田先生が出向し、上記2名が入れ替わりに大学に戻ってくる予定です。

最後に私、魚島です。今まで学生時代に剣道で培った（と思っている）気力と体力を武器に（と思っている）がむしゃらに走り続けてきました（と思っている）が、そろそろ限界が近づいてきたような気がしてなりません。新分野立ち上げのこの時期は、スタッフの数も充分ではなく、明け方に帰宅するといった悲劇に見舞われることもしばしばです。昼食を食べる時間がない、締め切りに間に合わない、金が無い、など辛いことがたくさんあります。しかし！ 分野のスタッフに助けられながら何とか生き残って、皆で世に誇れる補綴学分野を作り上げていきたいと思っています。

6. おわりに

クラウンブリッジを専門とする当分野の歴史は新大歯学部の中でも古く、諸先輩方に残していただいた財産はかけがえの無いものです。同門会会員の数も多く、我々現役スタッフの力強い味方です。今後もスタッフ一丸となって分野の発展、本学歯学部の発展、歯科界の発展を目指して頑張りますので、一層のご指導、ご鞭撻を賜れますよう、よろしくお願い申し上げます。



現在の医局員

後列左から 高野・田口・奥村・山田・井田・深井

中列左から マルセロ・アルアミン・長澤・川崎・川岸・岡田

前列左から 加来・富塚・魚島・秋葉・北村

出向中 石坂・笠間

摂食・嚥下障害看護認定看護師の活動を通して

看護部 右近 さゆり



はじめまして

私は看護部歯科外来の右近さゆりと申します。新潟市民病院で3年間勤務の後、1990年12月に当院の前身である新潟大学歯学部附属病院（その後平成15年病院名称変更 現在の新潟大学医歯学総合病院となる）に入職しました。現在は新潟大学医歯学総合病院看護部 歯科外来に在籍しています。看護師歴は22年になりました。2008年6月(社)日本看護協会、摂食・嚥下障害看護認定看護師の資格を取得しました。主人と義父母、祖母、高1、中1の息子と7人賑やかに生活しています。

摂食・嚥下障害看護との出会い

数年前から看護部では口腔ケアや摂食・嚥下の研修・実践に力を注いできました。又、野田先生らが主催する「食べる」というセミナーに参加したり、関連の記事、文献を読む機会が多くなるにつれ、食べ物を噛みきったり、咀嚼したり飲み込んだりという行為がほかならぬ歯科の分野に密接に関係していることを強く意識するようになりました。歯科病棟では口腔底がんの術後の患者様に「どうしていつまでも食べれないのだ。生きていてもしょうがない」と苦しさをぶつけられ、的確にケアをできないことに焦りを覚えました。手がかりを求めて、院内外の勉強会や通信教育を受けたりしました。

再び歯科外来に配属になった2003年日本摂食・嚥下リハビリテーション学会に参加の機会に恵まれたり、上司である村山看護師長から口腔ケア研究会のお誘いを受けたりと次第に摂食・嚥下障害看護への思いが強まりました。その後、資格取得

の決意に至るには、村山看護師長との出会い、アドバイスが大きな力となりました。

認定看護師教育課程に無我夢中でチャレンジ、2回の挑戦

看護師長から摂食・嚥下障害看護認定看護師という資格取得の道を聞き、刺激されて当時新潟にはこの分野の認定看護師は一人もおらず、手探りで受験に臨むも敗退。このまま引き下がるのも情けなく、失敗なりにつかんだコツを生かして再度チャレンジ。合格通知を手にしたときの感動は今も忘れません。

想像以上にハードな研修でした

(社)日本看護協会、認定看護師の認定審査受験資格を得るためには、指定された教育機関で6カ月以上の研修を受講し卒業しなければいけません。

教育機関はその当時開講していたのは2校でした。新潟からの交通の便、著明な講師陣や教員、実習施設など考慮し(社)愛知県看護協会が第一希望でした。

一方、現場を離れ、一流の講師陣による講義を受けられる日々は新鮮でしたが、それはつかの間、日ごと深まる内容と多岐にわたる科目ごとのレポート課題、試験の連続にスタート時の感動は不安と恐怖に変わりうつ寸前の精神状態も体験しました。

踏んばれた背景には、同期の仲間の支え、看護協会教務の献身的なサポート、エールを送ってくださった認定看護師、言語聴覚士の諸先輩、恩師や看護部長さん、看護師長さんはじめ同僚の皆さん加齢歯科診療室の先生のお力と、家族の励みがありました。今も、感謝でいっぱいです。

講義や実習で得たこと

今まで知識が浅かった摂食・嚥下のメカニズムについて脳神経や支配する筋肉がどのように働いて物を飲み込むのか少しずつ理解できるようになりました。例えば、脳血管疾患による嚥下障害と口腔咽頭癌術後の嚥下障害を比べた場合、前者は神経の麻痺や障害により運動や感覚の機能低下が原因となって起こるのに対して、後者は筋肉や神経そのものを切除するので、残された健側の部分を鍛えなければいけません。そのため、障害に対してのリハビリテーションなどの訓練内容が違ってきます。障害されている部位を把握するために必要な脳神経の働きや咀嚼・嚥下の筋肉の解剖や支配神経などの知識を身につけました。また、講義と実技で間接訓練や直接訓練の方法論を学びました。

聖隷三方原病院の臨床実習では、先輩である認定看護師の指導の下、受け持ちの患者様を通してリハビリ医、病棟看護師、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、栄養士などの嚥下チームとかわりました。看護師は患者様の嚥下だけではなく24時間の生活状況を理解し排泄、入浴などの日常動作の自立度、退院した場合、どの部分を援助していかなければいけないか、自宅改修はどの程度進んでいて、そのためには身体機能はどのようなリハビリが必要になるのかなども事例を通して学びました。

摂食・嚥下障害看護認定看護師ってどういう役割？

(社)日本看護協会、認定看護師制度は「特定の看護分野において、熟練した看護技術及び知識を用いて、水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより看護現場における看護ケアの広がりや質の向上をはかる」ことを目的としています。

近年、加齢や発達上の問題、疾病・治療による摂食・嚥下機能に障害をもつ人に対して、医療機関や介護施設、在宅など、さまざまな場所でより専門的で高度なケアが提供できる看護師が求められています。認定看護師は摂食・嚥下障害看護において自らのケアを実践するとともに、看護スタッフの指導や相談に応じることが大きな役割と

されています。

現在の歯科外来での看護師の取り組みと私の活動

歯科外来での看護師の取り組みを紹介します。3年前から摂食機能療法の一環として始めている看護師による頸部リラクゼーション（オイルマッサージ）や口腔ケアにくわえて、昨年度より看護師による嚥下訓練内容が広がりました。勉強会での演習、摂食機能療法実践記録用紙や訓練マニュアルの作成やパンフレットの利用も取り入れています。

1年以上が経過し、訓練の効果が出始めた患者様の笑顔に触れるようになり、やりがいを感じています。今年度は患者様への説明責任を遵守するため摂食機能療法の説明と同意書の作成や看護師向けの訓練マニュアルの詳細化、知識や技術の向上に向けた勉強会など外来スタッフと共に取り組んでいます。

口腔ケア研究会では前加齢歯科診療室の野村先生ら歯科医師、歯科衛生士、看護師の連携のもと口腔ケアパンフレットの作成や特別養護老人施設での口腔ケアや食事介助などの活動を経て、現在は摂食・嚥下障害に関するアセスメント表などの作成に携わっています。研究会では先生方など興味のある方々のご入会を広く募集しているところです。

一方、認定看護師としてましては、院内活動として看護部教育委員会主催の院内看護師を対象とした摂食・嚥下・口腔ケアの研修会の開催、NST（栄養サポートチーム）回診への参加もさせていただいています。

院外活動としては看護学生や介護・在宅医療にかかわる介護職、看護職、栄養士、歯科衛生士、セラピストなどを対象に施設などで講義をさせていただいています。「口から食べたい」「何とか口から食べさせたい」「安全に食べさせる方法は」「鼻の管を抜いて口から食べさせたい」嚥下障害の患者様やその家族、介護職の方々の熱い思いに、井上先生はじめ加齢歯科診療室の先生方のお力をかりながら、日々勉強させていただいています。これからもそのような出会いを大切にしていきたいです。地域の中でもお役に立ちたいと思っています。

認定看護師になって自分が変わったこと

食べる、食べられるという行為を、当たり前になっていた頃は考えもしなかった、嚙んで飲み込む人体の働きがいかに健康を維持し、日々を楽しむさせる事かを真剣に意識するようになりました。又、専門的に学ぶ機会を得て、見過ごしてきた患者様の嚙下障害の程度にハッと気が付き具体的な訓練の提案・実践ができることに喜びを感じます。

嚙下障害を抱える方の重症度はさまざまで、ご自分の唾液も飲み込めずムせる方から、姿勢・食形態・一口の量、飲み込み方を改善すれば食べれる方、飲み込む力をつけるリハビリが必要な方な

ど多様です。看護師として何ができるかを意識し、果たせる役割を模索するようになってきた事は、前進かなと思います。

最後にアピールさせてください

年々看護分野には、水準の高い看護実践のできる熟練した技術が要求されるようになりました。その分野は19に登っています。当院には感染管理、救急看護、皮膚・排泄ケア、集中ケア、緩和ケア、がん化学療法看護、小児救急看護などの10名の認定看護師が働いています。認定資格取得などに興味と関心を向けていただき今後も増え続けることを期待します。

素 顔 拝 見



医歯学総合病院・講師
(歯科総合診療部)

石 崎 裕 子

こんにちは。平成20年6月より講師となりました石崎です。これまで歯科総合診療部の助教、その前はう蝕学分野（旧第1保存学教室）におりましたので、おなじみの顔ということになるのでしょうか。

私は新潟県高田市（現在の上越市）の生まれで、皆さん想像されるとおり雪深いところで育ちました。子供のころの密かな遊びは2階の下屋根から積もった雪に向かって飛び降りること（絶対にやってはいけないと大人から怒られます!）、大きなツララでチャンバラ遊びをするなど、男まさりでした。最近では温暖化の影響なのかあまり積もらないようですが、私が高校生のときは3年続きの豪雪で、最深積雪量が3メートルを越え、通学時に電線をまたぐという経験をしました。雪国の冬は日常生活や子供の遊びに危険が隣り合わせで、危機回避能力の一端が養われ、今も役立っているのではと勝手な想像をしております。

さて、歯学部入学と同時に新潟市に移り、現在に至るまで、留学した1年を除けば新潟県から離れて生活したことがありません。生粋の新潟県人といえると思います。大学に残った経歴は他の人とちょっと異なると思いますので、これから述べたいと思います。歯学部を卒業後、本学歯科の研修医となり第1保存学教室に残りました。2年間の研修修了後、研究生になりましたが、大学にいるよりも外勤に出ていることが多く、出張やアルバイトに奔走していました。その頃は仕事、生計、また精神的に最もつらい時期でした。この経験が現在の土台となっていると思います。研究生とし

て2年目を終えようとしている頃、佐渡の町立歯科診療所の常勤歯科医として赴任しました。任期は当初6ヶ月の予定でしたが、結局1年6ヶ月を診療所長として過ごすことになりました。本土より10年先をゆく超高齢化の地域であったこと、近隣にバックアップを依頼できる救急病院がなかったこと、過去に無歯科医地域であり欠損補綴が多かったこと、優秀な歯科技工士がスタッフにいたこと等、いろいろな面で勉強する機会に恵まれました。1年を超える任期であったことも、患者様のその後をみる事ができ、自身の評価・フィードバックになったと思います。さて、大学に医員としてもどってきて1年後に助手になり、臨床実習のライターとして6年生を指導するようになりました。助手になって2年経たないうちに当時のボスである岩久教授より「君、卒後何年目だい?」という問いかけから始まって、歯科臨床研修のための歯科総合診療部の創設に伴い移動となり、平成12年より歯科総合診療部の専任となりました。その後、学位の取得、UCSFへの留学を経験し、現在は卒後歯科臨床研修の指導、診療室のリスクマネージャーとして奮闘しています。研究は保存修復の分野で臨床研究やコンポジットレジン関連の基礎研究をしています。とくに天然歯の咬耗・磨耗について、長期にわたる息の長い研究をコツコツとしています。

ここまで仕事の話ばかりでしたが、趣味について1つ。大学学生時代は休止しておりましたが、子供のころに始め、大学卒業からもずっと続けている趣味があります。書道（かな書道）です。小さいもの（半紙）も書いていますが、大きいもの（半切、聯落サイズ）も書いています。毎月の締め切り提出と年1回の展覧会の出品、昇段試験に明け暮れておりますが、今年からまた新たな挑戦として大きな展覧会への出品を検討中です。もし作品がお目にかかることがあれば幸いです。先生が田上町におりますので、月2回程通って、帰り

に温泉に入ってくるのが現在の楽しみです。

派手なことではできませんが、継続は力なり、をモットーにコツコツと地道に取り組むことが特徴の人間と思っています。まだまだ至らないことは多いですが、これからも皆様どうぞよろしく願いいたします。

✧

心が疲れたら田舎へ行こう！

歯科麻酔科診療室

田 中 裕

歯学部ニュースは平成12年に「新任助手紹介」以来の登場となります。今回「素顔拝見」という原稿依頼を頂き、何を書けば良いものかと悩みましたが、私を御存じない方は多いと思いますので、まずは自己紹介させていただきます。私は地形や県民性から「日本のドイツ」と言われているらしい(?)長野県の、その中ほど、上田市の出身です。気がつけばもう20年以上も新潟市民として居座り続け、現在歯科侵襲管理学分野で仕事させて頂いておりますが、長野県人は愛県心が強いことに加え、「頭が固い」、「閉鎖的」、でも「話が長い(語りたがる)」、そして「信濃の国が歌える！」という、ちょっと他の県とは違う独特の特徴があるのだそうで、私もその県民性は未だに体に染みついているなあ〜と実感することしばしばです。そんな故郷も今は他の市町村の例にもれず人口減少・少子高齢化が進んでおり、私の同級生世代が今必死に町おこしを頑張っているということを風の便りで聞きました。そこで今回は素顔拝見とはかなりかけ離れてしまっていますが、折角頂いた機会をお借りして、町おこしのお手伝い(宣伝)がてら、故郷をちょっと思い出してみたいと思います。

私の故郷、上田市は周囲を360度山に囲まれた盆地であります。ちょうど長野市、松本市、そして軽井沢を結んだ三角の真ん中に位置しております。山中の盆地ですので、私の実家は標高約500mのところであり、新潟でいえば弥彦山の中腹に住んでいるような環境です。夏は涼しく、冬は死ぬほど寒い、でも風雨は非常に少なく傘は殆ど必要



としなからってして住みやすい気候です。さてこの上田市の名産といえますとリンゴ、そば、くるみ、野沢菜、おやき、などがあり、特に「そば」は全国区的にもかなり有名で美味しい蕎麦屋さんが数多くあります。しかし私の御用達は実はおそばでなく、JR上田駅からちょっと路地に入った「中村屋」という店の「うどん」です。これは馬肉を使ったうどんなんですけれどこれが絶品で、上田市民御用達の隠れた名店で、この店のうどんを食べるために私は実家に帰省するといっても過言ではありません。さらに裏名産というものも実は存在しておりまして、「蜂の子」「ざざ虫」「イナゴの佃煮」という海無し県ならではの蛋白源3大珍味があります。もう二度と食べたいとは思わない珍味ではありますが、なんと今ではお土産として売っているそうです。一方、観光地としては、大学ラグビー合宿のメッカである菅平高原、美ヶ原高原(美術館)、信州の鎌倉といわれるほど数多くのお寺や神社に囲まれた別所温泉がありますが、特に「南向観音」の別名をもつ国宝善光寺とは対の存在である北向観音は有名です。さらに、戦国時代のドラマでは必ずチョイ役ででも出てくる真田昌幸・幸村、この上田城を作った真田家の屋敷跡地というのが、私の母校上田高校です。今も高校の周りにはお堀が残っておりまして、観光名所となっております。そんな城跡・お寺・神社といった古い建物、そして高原や山ばかりの田舎町が上田市の特徴ではありますが、実はこの田舎さ加減が今では映画やビデオクリップの撮影場所として有名になっているそうで、最近では「私は貝になり

たい]、「博士の愛した公式」など数多くの映画や、ミュージシャンのビデオクリップに上田が撮影場所として使われているのだそうです（詳細は「信州上田フィルムコレクション」<http://www.ueda-cb.gr.jp/fc/>）。また先日公開となったアニメ映画「サマーウォーズ」の舞台が上田市なのだそうで、この映画のキャッチコピーが、まさに『夏休みには田舎に行こう！』なんだそうです。私は今でこそこの田舎の風景に癒されたくて帰省するのですが、子供の頃はその良さが分からず、それ以上に海への憧れが強くありました。ですから子供の頃から千曲川で遊びながらいつかは海の近くに住んでみたいという希望を叶えるため、いつしか千曲川を下り、信濃川と名を変えて海へと続くこの川つながりの新潟市へとたどり着き、現在まで居座ってしまいました。今は海のある新潟が大好きですが、でも疲れたり落ち込んでしまった時には「この信濃川の水は、実家へとつながっているんだよな～」と信濃川を眺めながら故郷を思い出して癒され、それを励みに日々仕事にいそしんでおります。

是非皆さんも心が疲れてしまった時には、新潟と川でつながっている田舎町、私の故郷上田市にも足を運んで頂き、田舎の醍醐味を満喫され癒されてみてはいかがでしょうか？ 映画やビデオに出てくる古い街並みや自然に囲まれると、ちょっとタイムスリップしたような、映画のエキストラになったような、そんな気分になって、すこしだけ気持ちが楽になるかもしれませんよ。

＊



医歯学総合病院
(口腔外科・歯科病理検査室)

丸 山 智

平成21年2月1日より医歯学総合病院の講師として歯科病理検査室での診断業務を担当させていただいております。本学卒業29期生です。平成17年5月1日より口腔病理学分野の助手として勤務

させていただき、その際歯学部ニュース（平成17年度第2号）の素顔拝見のコーナーで、生い立ちから病理学を専攻するに至ったいきさつを書かせて頂きました。以前にも少し書かせていただきましたが、口腔病理学は口腔顎顔面領域に生じる病気を解析することを目的とした病理学の専門分野で、我が国では基礎系に属しており、教育は一般病理学および口腔病理学という基礎系分野を担当しています。一方日常の臨床業務としては、口腔顎顔面領域に生じる病気の病理細胞・組織診断（確定診断）を担当し、臨床系分野同様に、歯科臨床において適切な診断・治療をおこなうために直接関わる重要な貢献をおこなっております。現にこういった観点からか、欧米では口腔病理学は臨床歯科の一分野として位置づけられています。しかし日本では残念ながら上記のとおり基礎系に属しており、代わりに本学では、口腔病理学分野の臨床業務をおこなう拠点として、私の勤務する歯科病理検査室が医歯学総合病院内に開設されています。そこで今回は私が勤務している病理検査室のこれまでのあゆみと今後の展望について私なりに書かせていただこうと思います。

歯科病理検査室の歴史を振り返ってみますと、平成5年6月14日に当時の歯学部附属病院に病理検査室が開設されたのが始まりです。開設されるまでは、口腔病理学講座の研究室内で標本作製から診断までをおこなっていたようですが、当時の病院長ならび関係の先生方のご配慮、そして朔教授をはじめとした口腔病理学分野のスタッフの努力のおかげで、臨床業務を附属院内でおこなえるようになったとのことで、そのときの病理関係者の感激は大変おおきなものであったと聞いております。開設後も包埋作業等の自動化や診断システムの構築等をすすめ、さらに近年では自動免疫染色装置の導入などに取り組み、日々診断業務をおこなうために快適かつ効率のよい作業環境の整備をおこなってきました。また教育的側面では、歯学部5・6年生の臨床実習の中に生検・病理検査実習を取り入れて、臨床場面で病理検査を利用できる歯科医師の育成をおこなってきました。そしてこのたび私が歯科病理検査室に配属になったのと時を同じくして、病院機能評価の観点および

病院診断業務は病院スペース内でおこなう方が望ましいとのご配慮から、この5月より歯科病理検査室内に診断室として診断をおこなうスペースを確保していただき、長年の課題のひとつでありました病理診断業務を学部研究室から病院の中の診断室でおこなうという本来のかたちに移行しつつ、診断室の整備をすすめております。

また、2008年4月より病理診断科が標榜科となり、セカンドオピニオンといった社会的ニーズが高まっています。その一方で、歯科医療における病理検査現状に目を向けてみますと、病理検査依頼がほぼ口腔外科領域に限られており、歯科全体では歯科医師のなかで病理検査に関する認知度は未だ低く、歯科臨床において病理検査が広く行われていないという状況があります。今後は、病理検査の精度向上はこれまでどおりわれわれの使命と考え、日常の研鑽をおこたらないことはもちろんですが、これらの現状を受け止め、歯科医療の向上につながるように変えていくかを大きな課題と考えており、その中心的存在としての役割を歯科病理検査室が果たせるように、微力ながら努力していきたいとおもいます。どうぞよろしくおねがいいたします。

✧

噛み合わせ診療科・助教

昆 はるか

こんにちは。義歯入れ歯診療室所属の昆と申します。大学院を卒業後、分野に在籍せず、勤務医を経験した後、平成18年からまだ大学に戻ってきました。しばらく大学を離れていたせいで、研修医の先生から「先生はどこの大学の出身ですか？」と聞かれたこともあります。大学に残っている同期生の名前を挙げると「そんなに学年が離れているのね」という顔をされ、私も年をとったなあと感慨深いです。考えて見ますと学部を卒業してもう10年が経ち、卒後に描いていた10年後のビジョンとかけ離れた現実に努力不足を感じる今日この頃です。

さて、最近学生さんの話を聞いていると、卒後どうするか悩んでいるのだなあと感じます。そん

な話を聞くと、なんだか自分が学生の頃を思い出してとても新鮮な気分です。私は飲み込みが遅いところがあり、学部卒業後いきなり大学の外に勤めるのに不安があったことや、ちょっぴり研究に憧れて？ いたため大学院に行こうと早い時期から決めていました。大学院4年間は必ずしも結果がでることばかりでなく、苦しむことも多かったのですが、幸い良い先輩達にも恵まれて最終的には大学院進学は私の人生のなかで通るべき道であったかなと納得できるようになりました。今は卒後研修が必須なので、選択肢が少ないですが、大学に残るにせよ、研修を終えて学外に出るにせよ、望んでいると思わぬすばらしい師と会うこともあります。私自身は大学院時代には、教授をはじめいろいろな先生から学ぶ機会を得ることができたのは幸運だったと思いますし、さらには学外に勤務することで、専門の違う、他大学出身の院長の診療を身近に見ることで、新潟大学にいたら知ることのなかった世界を垣間見ることができたかなとも思っています。

話しは変わりますが、ここで私の大学院時代の思い出について触れたいと思います。その当時、先輩達が結成した？ 有酸素運動部なるものがあり、「大学院4年間にマラソン大会に出場し、合計100km走ろう！」という目標がかかげられ、私はひそかに燃えていました（残念ながら、新潟マラソン10km部門で3回、浦佐の山岳マラソン「歩こうの部 20km」2回で合計70kmしか走れず、目標に達することができませんでした）。先輩方は新潟マラソンの20kmやフルマラソンに出場したりしていましたが、なかなか20kmを走るというのは容易なことではありません。そこで私がたまたま見つけたのが、浦佐の山岳マラソン「歩こうの部20km」だったので。走るではないけれど、まあ山の中を20km散歩するのは楽しいだろうし、豚汁とおにぎり券がついているのが嬉しく、参加前はピクニック気分でのんびり構えていました。しかしスタート地点には、いかにも鍛えています！ という人々が！ 少々恐れをなしながらも、スタートすると、「歩こう」のゼッケンをつけた年配の方が、スタートとともに走り出したではありませんか！ 平地を走るのでも十分苦しいのに、浦佐の山岳マ

ラソン「歩こうの部」は、スタートからしばらく坂道にも関わらず、皆さん走っていくのです。アップダウンがある上に9月の残暑も加わって、かなり苦しいのですが、私より明らかに年配の人にしゃきしゃき追い抜かれると、やめられなくなる気分で、なんとか2回とも完歩（完走？）しました。2回目に参加した際には、両親がゴールで待っていてくれてとても嬉しかった思い出があります。いまやマラソンのマの字もない生活ですが、昨年から教授の野村先生が新潟マラソンに参加しているのを聞き、来年こそは10kmから挑戦したいと考えているところです（100kmにはまだ30km足りないで……）。

＊



助教
（組織再建口腔外科学分野）

小 島 拓

こんにちは。組織再建口腔外科分野の小島です。歯学部ニュースでは今まで、「大学院入学にあたって」、「大学院修了にあたって」を書かせていただきましたが、今度は「素顔拝見」を書くことになってしまいました。もう書く内容が無いような気もするのですが、前回の続きということで大学院修了後のことを中心に書きたいと思います。

平成15年に本学を卒業し、大学院生として組織再建口腔外科学分野に入局、平成19年3月に大学院を修了しました。その後、4月には医局の関連病院である鶴岡市立荘内病院歯科口腔外科に1年間長期出張に行かせていただきました。大学院卒業後で臨床経験も技術も未熟な自分を、医長の先生は大変厳しく指導してくださいました。長期出張に行ったばかりの頃は自分の診療に自信がなかったこともあり、診断・治療方針などをすぐに先生に聞いてばかりいて、「すぐに人に聞くな。まずは自分で考える。」と厳しい言葉をいただきました。それまでの自分には、「上の先生がいるから大丈夫」といった甘さがあったと思います。

その後は、なんとか自分自身で解決できるように努力を重ねました。経験が浅い分、知識だけでも、口腔外科に関する文献をたくさん読んだり、医長の先生の診療を見学して技術を学んだり、できる限りのことをしました。もちろんそれでもわからないことには、自分なりの考えを持った上で相談するようにしました。「まず自分で考えてみる」という姿勢は、今の自分にとってとても大きな財産になっていると思います。思い返すと、このように自分で解決策等を考えるのは、実は大学院の時に一番学んだことのように思います。思うような研究結果がでなかったとき、何故うまくいかないのか、何がいけないのか、どうしたらいいのかと頭を悩ませ、他の人の研究を見学させてもらったり、論文を読んだりとなんとか解決策を見つけようとしたものでした。臨床も研究も取り組む姿勢は一緒だと思いました。おかげでたくさんの臨床経験を積むことができ、外来小手術はもちろん、手術室での執刀も数多く経験させていただきました。総合病院での勤務だったこともあり医科の先生方とお話する機会にも恵まれ、全身疾患のある患者様への対応や、医科の先生方がどのような考えで治療を行なっているかなど直接お話を聞くことができ、大変勉強になりました。

そして、一年間の長期出張を終えた後は大学に戻り、現在に至ります。日々の診療の中で、以前には気付かなかった反省点に山ほど行き当たる毎日です。これは一度大学を離れ、再び大学に戻るといことで、自分を見つめ直すことができたおかげだと思っています。その意味でとても有意義な経験でした。大学には齊藤先生を始め尊敬できる先生方が多数おられます。そのような先生方の診療を身近で見られること、また、一緒に診療ができることは本当に恵まれていると思います。こんな私ですが、外来では教授係を担当させていただいております。日々多くのことを勉強することができ、本当に感謝しています。しかし、自分の段取りの悪さから外来を走り回ることが多く、齊藤先生をはじめ、患者様、周囲の方々に迷惑をかけ、大変申し訳なく思っております。齊藤先生から「緊急時以外は走らない！」と注意されたとき、思わず「教授係はいつも緊急です！」と訳のわからな

い言い訳をして苦笑いをされたこともありました。まだまだ余裕の無い私ですが、少しずつでも成長していけたらと思っております。

最後になりましたが、帰りが遅くなることが多い旦那を許して（許してない？）支えてくれる妻と、家に帰ると玄関先まで「パパー、お帰り！」と迎えに来てくれる息子（おかげで夜更かしの癖

をつけてしまいました…）には、いつも元気をもらい感謝しています。休日ができれば家族でドライブ、小旅行に出かけるのが今の一番の楽しみです。

周囲の方々への感謝の気持ちを忘れずに今後も頑張っていこうと思います。どうぞ宜しくお願いします。

学 会 報 告

平成21年度 新潟歯学会報告

新潟歯学会集会幹事 富 塚 健
医歯学系・生体歯科補綴学分野

平成21年度新潟歯学会の集会係りは生体歯科補綴学分野が担当しております。平成21年4月18日(土)、第42回新潟歯学会総会が歯学部講堂において開催されました。総会では例年通り昨年度の会計決算報告および会計監査報告が行われ、今年度事業計画ならびに予算案が承認されています。

総会終了後、昨年度より3題多い13題の一般口演が行われました。特別講演では国立長寿医療センター研究所・口腔疾患研究部部長の松下健二先生を講師にお迎えし、血管生物学の観点から歯周病の発症病理に関する知見を御講演いただきました。演題は「“よく老いる”ための血管生物学のすすめ ―血管病としての歯周病とその制御―」というものでした。生活習慣病としてとらえられるようになった歯周病について、その発症、進行に年齢が関与している可能性があること、とくに動脈硬化が歯周組織の再生力を低下させ、歯周病原菌に対する抵抗力を弱めることなどについて、先生の研究結果をご紹介いただきました。この場をお借りして改めて御礼を述べさせていただきます。

つづく今年度第1回新潟歯学会例会は7月18日(土)に総会と同じく歯学部講堂で開かれました。昨年度を大幅に上回る24題の一般口演があり、活発に討議がなされました。また、一般口演の後、教授就任講演として、新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食・嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授に「摂食・嚥下機能とその障害 基礎と臨床と私」というタイトルで御講演いただきました。近年、医療の現場においてもADLの向上のための摂食・嚥下機能回復の重要性が認知されるようになってきましたが、先生のこれまでの研究成果やご自身の体験などを交えながら、摂食・嚥下リハビリテーションの現状と将来の展望について熱く語っていただきました。

なお、今年度の第2回例会は11月21日(土)に開催される予定です。これまでと同様にオンライン(<http://www.sksp.co.jp/nds/index.html>)による演題登録で、締め切りは9月18日(金)です。どうぞよろしくお願いいたします。

同窓会だより

歯学部同窓会の活動について

新潟大学歯学部同窓会 会長 多和田 孝 雄



会長に就任して3期目も後半の年度に入りました。役員に支えられて、会員重視の同窓会運営をこれまで心がけて参りました。以来、既存事業の充実と新規事業の開拓を続ける中、部署の

統合や新設を始めこれに付帯する規則や規約の策定、更に会則の大幅改正にまで踏み込み歯学部同窓会は強力な組織になって参りました。情熱のある有能な役員のお陰であり、常々感謝しているところであります。

本年新潟大学は創立60周年を迎え、10月18日(土)には ANA クラウンプラザホテル新潟(旧ホテル新潟)において記念式典、講演会、祝賀会が開催されます。同イベントは午後の開催ですが、同日の午前には各学部主催によるホームカミングデーが企画されます。歯学部においては学部と同窓会の共催の形式をとることにしており、歯学祭も同日開催で我々と歩調を揃えることになっております。

本年6月13日(土)、初めての同窓会クラス代議員会議が歯学部大会議室で開催されました。代理出席を含めてほぼ全クラスの代表者が一堂に会し、60周年記念事業への協力や会員を重視した同窓会運営への貴重なご意見をいただきました。今後の同窓会事業に反映したいと考えております。

歯学部同窓会は昨年度から新潟大学、今年度から明倫短期大学の受験生増への支援を開始しました。取り組みとしては、全国の会員診療所の待合室に両校の学生募集パンフレットを掲示するというものです。送料等の経費について新潟大学分は

無償としております。この仕組み作りは福島正義副会長に尽力いただきました。

本年度の同窓会総会におきまして女性会員の為のワークライフバランスやワークシェアリングを念頭においた女性会員支援部及び女性会員支援理事の新設が承認されました。この10年歯学科の卒業生の半数は女性です。口腔生命福祉学科においてはさらに女性の比率は増します。女性会員が就業するに当り、出産、育児等女性特有の問題が存在することは女性でなくとも容易に推測できます。同窓会としては今後も増加するであろう女性会員の就業、更には女性会員同士のコミュニケーションの場として役立つよう組織や連絡網を駆使した仕組みを作りたいと考えております。女性会員支援理事には田中みか子先生、岡田朋子先生、丸山薫先生、石澤尚子さん、市川加奈さん、石山友香里さん、安斎さや香さんが就任しました。

2008年度第2回歯学部教授会 同窓会定期協議会

渉外担当理事 飯 田 明 彦

- I. 日 時 2009年2月5日(木)19時~21時20分
- II. 場 所 歯学部特別会議室①
- III. 出席者 教授会：前田学部長、齊藤副病院長
同窓会：多和田会長、佐藤副会長、福島副会長、鈴木副会長、成田専務理事、飯田渉外担当理事

IV. 報告・議題

多和田会長の挨拶に引き続き、下記の内容について話し合われた。

1. 学部から

歯学部の近況について、前田学部長から詳細な資料に基づいた説明があった。



1) 人事について

〈学部長〉

前田健康教授再任 (H21. 4. 1 ~ H23. 3. 31)

〈教授関係〉

配置換え 山田好秋教授

(副学長専任 H20. 9. 1 付)

選考中 口腔生理学分野担当教授および歯科総合診療部担当教授 H21. 4. 1 付発令予定

任期満了 里方一郎教授 (H21. 3. 31 付)

〈准教授関係〉

依田浩子 硬組織形態学分野

泉 健次 口腔解剖学分野

〈特任准教授〉

井上佳世子：大学院 GP

〈特任助教〉

本田朋之(日歯新潟出身、新潟大院修了)、原田

史子(鹿児島大出身、新潟大院修了)：大学院

GP

鈴木晶子、奥井隆文：歯学連携

〈その他〉

・ H20年度定員削減・流動化定員拠出 3 名

・ 病院講師定員下位流用振り替え

2) 予算について

i) 平成21年度概算要求事項の内示について

・ ファントムシミュレーション実習システム (新規)

・ 大学間連携研究経費 (新規：H20年度特殊要因経費から、向こう 4 年間)

・ 口腔生命福祉学科 3 年次編入学定員 $\Delta 4 =$ 修士課程設置に伴う

ii) H20年度科学研究費補助金

歯学系(病院歯科系含む)で約 1 億 7 千万円(直接経費のみ)

iii) 設備・装置等

・ 学生アメニティスペースの整備(3・4階)

・ 4階保存実習デモ室視聴覚設備一式(学長裁量経費)

・ 4階・5階実習室個別空調設備一式

・ C棟トイレ改修一式(3階~7階)

・ 遺伝子解析システム一式(大学間連携研究経



費)

・ 全自動免疫染色システム一式(学長裁量経費)

・ HD 配信システム(大学院 GP)

・ バーチャルスライドシステム(大学院 GP)

・ マイクロ CT 装置

3) GP について

・ 大学院教育改革支援プログラム(大学院 GP)「プロジェクト所属による大学院教育の実質化」(H20~22年度)

・ 大学教育支援プログラム(特色 GP)(H20年度終了)

4) 大型改修について

早ければ H22年度から開始される。それに

向け WG が設置された。各分野が 25%の居住面積を拠出し共通スペースとなる。同窓会室

については改修中の移動が必要。その後のありかたについては今後の検討課題。

5) その他

・ 歯学教育の改善・充実に関する調査協力者会議第 1 次報告書

入学定員の適正化

臨床実習の充実化

2. 病院から

最近の病院の動きについて齊藤副病院長から説明があった。

1) 研修医について

65名の募集に対し61名がマッチした。本学出身者が39名と例年より多数を占める。

2) 外来棟の移転について

現在診療ユニットは190台が稼働している





が、移転の際には140台程度に減少する予定。
コンピューター管理等を行い有効利用する予定。

3. 同窓会から

1) 新潟大学創立60周年記念事業への歯学部と同窓会の連携について話し合われた。

上記以外、時事問題などについても活発な意見交換がなされ、今後とも同窓会と大学側が協力体制をとっていくことが確認された。

平成21年度新潟大学歯学部 同窓会・総会の報告

副会長 福 島 正 義

平成21年度歯学部同窓会総会は平成21年4月18日(土)に歯学部で開催された。総会に先立ち恒例の学術講演会が講堂で行われた。今年度は新潟大学創立60周年事業の一環として口腔生命福祉学科担当および新潟大学超越研究機構「歯周一全身プロジェクト」の山崎和久教授をお迎えして「歯周疾患と冠動脈心疾患の関連—因果か相関か—」と題した講演が行われた。例年以上に多くの参加者があり、歯周病と全身疾患との因果関係に対する関心の高さがうかがわれた。

講演会に続いて総会が大会議室へ会場を移して開催された。開会の冒頭に昨年度の6名の物故会員に対する黙禱が行われた。引き続き多和田会長の挨拶があり以下のような内容の方針が述べられた。1) 新潟大学創立60周年記念事業の1つであるホームカミングへの協力、2) 女性会員支援部の立ち上げ、3) 歯学部大型改修に伴う同窓会室の一時的な外部移転、4) 財務基盤の強化である。議題では各部会の平成20年度活動報告が成田専務理事より一括報告され、平成20年度一般会計および特別会計の決算が満場一致で承認された。引き続き、平成21年度活動計画案と予算案が審議され、満場一致で承認された。さらに協議題として新潟大学創立60周年記念事業のホームカミングデーの開催について担当の野村副会長より説明があり、

歯学部と協議しながら準備を進めることになった。佐藤副会長が中心となって数年をかけて慎重審議されてきた同窓会会則改正案、天災等被災に関する見舞規約と同窓会費を財源とする見舞事業内規改正案および学生に関する表彰制度規程と同内規案が承認された。また、多和田会長から女性会員の就業支援を行うために女性会員支援部の創設と3名の担当女性理事の選任の提案があり、満場一致で承認された。さらにまた、長期勤続教員への退職祝金贈呈について提案があり、賛同が得られた。その他に歯科医師国家試験対策の支援を歯学部後援会と共同して行っていくことが確認された。役員人事では鈴木政弘総務理事が副会長に就任し、広報および会計理事の一部交代が行われた。

総会后、割烹「まつや」で学術講演会講師の山崎教授を囲んで懇親会が行われた。周知の通り、山崎教授は1980年以来、本学に在職されているため、懇親会参加者のほとんどと顔見知りであることから時間を忘れて昔話に話が弾んだ。

平成21年度歯学部同窓会 総会学術講演会

「歯周疾患と冠動脈心疾患の関連—因果か相関か—」を拝聴して

14期生 有 松 美 紀 子

4月18日に同窓会総会と新潟大学超越研究機構歯周一全身プロジェクトのリーダーの山崎和久教授の学術講演会が開催されました。

歯周疾患は、毎日の診療において悩み多き疾患です。現在では全身疾患をお持ちの高齢者の患者様が多く、医学の知識や医科との連携が必要であり、スクリーニングでさえも抜歯と同等に一時的な菌血症にも気をつけなければなりません。当院でもSRP後、心筋梗塞を起こされた患者様もおいででしたの早くお聞きしたいと思っております。

毎年、同窓会の総会は、講演会はもとより同窓





の先生方にお会いできることを楽しみにして参りますが、今年は同級生の佐藤圭一先生の隣で拝聴致しました。学術的な高尚なお話は彼に任せて私は、娘の幼馴染のきょうこちゃん/パパのお話として感想を書かせて頂きます。

まず、講演の結論は、歯周疾患と冠動脈心疾患は因果関係ありということで、我々開業医も益々ペリオデンタルメディスンの勉強が必要であり、その研究に大いに期待したいところです。CADの病因論が脂質中心から炎症中心にパラダイムシフトされたとのこと、歯周病が有意にCADのリスクになっているとのことでした。

この事実は、毎日の臨床において患者様が自分の歯周病の病態を知り、生活習慣を改善し、治療に協力して頂くための大きなモチベーションになります。歯周病の進行を抑えることができれば、CADや糖尿病等の病気を軽減させ、患者様のQOLを向上させ、大きく言えば医療費を減少させることができるでしょう。

山崎先生はオーストラリアに留学され研究をされたそうですがHSP(Heat Shock Protein)を解明するのに14年もかかれたとか。ユーマタつぷりに研究の苦労話もして下さり、頭が下がる思いでした。

幼稚園・学校の行事や塾のお迎え等でお見かけした山崎先生は、いつもにこやかで優しいパパぶりを発揮されておられました。そのままの講演でした。

以前、奥様から留学時に幼いお嬢様方にご購入された乳歯箱を見せて頂いたことがあります。日本では、脱落した乳歯は屋根の上や床下に捨てる習慣がありますが、外国では乳歯箱に保存しておくそうです。奥様から見せて頂いた歯の妖精のついた陶器は、拙著「歯の女神ティンクル」執筆にあたり大変参考になりました。

脱落した乳歯は乳歯箱に大切にしまうことができますが、永久歯は喪失したら悲しいこととなります。山崎先生の研究が進み、歯周病で永久歯を喪失する人が減少することを心から望みます。臨床家にとって難しい話よりも明日の臨床に直接に

役に立つ事をお話して下さったことも先生らしいお心使いと思えました。

新潟大学創立60周年記念にふさわしい素晴らしいお話をありがとうございました。

平成21年度歯学部同窓会 総会学術講演会

「歯周疾患と冠動脈心疾患の関連—因果が 相関か—」を聴いて

14期生 佐藤圭一

土曜の午後、久しぶりに母校の講堂に行き同窓会の学術講演会に出席した。

講師の山崎和久教授は医局の先輩であり、先生が若い頃に夜遅くまで研究室で仕事をする姿を間近にみていたが、その研究が20年の時を経てようやく一つの形になってきたとお話は大学で研究を続けておられる多くの先生方の姿として心に強く残るものがあった。歯周病の病巣に集まる多く免疫細胞の研究を続け、そこに存在する多数の歯周病原菌が持つ抗原全てに対しては免疫細胞が反応していない、そこから細菌に共通する抗原が免疫応答に重要な役割を果たしていることが疑われ、その原因としてHSP(Heat Shock Protein)60に着目されとのこと。さらにそのHSP60が動脈硬化症、特に冠動脈疾患の引き金となる重要な役割を果たしているのではないかということまでたどり着く過程は、長年の地道な研究の結実過程としてたいへん聞き応えがあった。

歯周病と全身疾患との関連のメカニズムとしては、①歯周病原細菌や細菌産生物の直接作用、②細菌の感染により歯周炎の局所で産生された炎症物質による作用、③歯周病原細菌に対する免疫応答の交叉反応性、などがあり、歯周病が心疾患をはじめとする全身疾患の深くかかわっていることは疑いの無いことで、今はそのメカニズムについて山崎教授をはじめ多くの研究者が研究しているが、いまだ結論は出ていないとのことだ。臨床像と実験室での病態との違いの問題や(臨床像は個人





個人で大きく異なるという問題)、実験動物(ネズミ)の遺伝子型がそろっていることによる実験のしやすさとその反面実際の生体での反応と違いが生じているという問題は研究室と診療室での病態の違うという問題を凝縮しているのだろう。我々臨床医が対象とする患者様は一人一人違い、歯周病の病態も一人一人違いがある。実験室ではできるだけ均一の条件で実験を行い歯周病の病態の解明をする。実験結果を受けそれを目の前にいる患者様に応用するのは我々臨床医であろう。大学の先生方が続ける研究室での日々の研究成果を目の前の患者様に応用できるかは我々臨床医の側の課題であろうか。常に最先端の研究成果にアンテナを張っている必要性を強く感じた誠に充実した半日であった。

歯科医師国家試験合格体験談を聞く会

後援会会長 14期生 有松 美紀子

平成20年、平成21年に上記会を歯学部講堂にて開催致しました。歯科医師国家試験は歯科医師の需給問題から年々難易度を増しており平成20年度・第102回の全体の合格率は、70%を切っており、資格試験ではなく選抜試験になっています。今後もこの傾向は続くと予想され、歯学部を卒業しても歯科医師になれない人があふれることになります。

本学は、基礎学習のみならず臨床実習にも重点が置かれ、非常にバランスの良い教育がなされていますが、その反面、他大学に比べると国試に対する情報量が少なく、また、国試勉強に取り組み始める時期が遅い傾向があります。臨床実習は10月までありますので、その後から本格的に取り組むことになり、2月初めの試験日まで予断の許さない状況になります。研修医制度が始まり、希望する施設の見学、受検、場合によっては協力型施設への見学も6年生の春休みから12月の間にこなさなくてはなりません。25年前に受験した私の時代では考えられないほど厳しくなっています。

しかし、本学は現役生は合格率88%という全国でもトップクラスの成績をおさめており、毎年優秀な歯科医師を輩出しております。

では、合格者はどのような勉強のやり方をしているのでしょうか。同じ情報を同時に同所で共有し、全員合格を達成するために、6年生をメインに4年生、5年生にも声をかけ、希望者は一堂に会し、本学に残っている研修医さんたちに発表して頂きました。本学卒のみならず他大学卒の研修医さんたちにも事前にアンケートに答えて頂き、その結果もまとめました。

昨年は、細川由香先生、高橋希先生に「受験勉強の取り組み方」「模試の結果」など、今年は、4月23日18時～19時、2階講堂にて、渡辺平馬先生、近藤由記先生、斎藤浩太郎先生に「マッチングについて」「受験勉強の仕方」などをパワーポイントを使用し具体的にお話して頂き、本学の協力型施設で研修中の野澤恩美先生は合格体験談を寄稿していただき、各発表内容は6年生の国試対策委員が大学パソコンでいつでも見られるように管理





してくれています。当日は、発表後に国試の件だけでなく就職や開業等についても学生さんから活発に質問がなされ発表者だけでなく後援会、同窓会役員も回答に努めました。

また、研修医さんたちは、後輩のために上記会の改善案等も提案して下さい、今後は学生主体、後援会、同窓会は支援という形で進行することになりました。

このような会を開催することを許可して下さった大学側、小野教授、石崎先生、準備段階からご協力頂きました同窓会会長の多和田先生、そして相棒の後援会副会長であり14期同級生の佐藤圭一先生には心から感謝しております。来年度は、更に有意義な会が継続されることを願っております。

最後に、斎藤浩太郎先生の言葉で締めくくりたいと思います。6年生たちへのメッセージです。

「僕たちが達成できなかった合格率100%を是非達成させてください」……後援会、同窓会会員の総意です。

新潟大学創立60周年記念事業への 歯学部同窓会の取り組み

副会長 野村修一
ホームカミングデー担当

新潟大学は今年の5月に、昭和24年の新制国立大学設置から60年を迎えました。

このメモリアルイヤーの記念事業として、10月18日(日)を中心として様々な企画行事が開催されます。

10月18日(日)

午前 同窓生が母校を訪れる「ホームカミングデー」

午後 記念式典：14：30～15：20

記念講演会：15：30～16：30

講師

益川敏英・京都産業大学教授・京大名誉教授 2008年ノーベル物理学賞受賞

演題

「科学と自由—私の研究生活から—」
祝賀会(懇親会)：17：00～19：00

午後の会場は ANA クラウンプラザホテル新潟

歯学部と歯学部同窓会は、「ホームカミングデー」の企画として、以下を開催します。

1. あの時君は若かった：歯学部今昔物語

会場：新潟大学医歯学総合病院

歯科外来棟待合室

日時：平成21年10月18日(日)10：00～12：00

内容：写真パネルの展示

歯学部の創立から現在に至る写真

大学キャンパス(五十嵐、旭町)の今と懐かしの新潟市内

同窓会支部活動やクラス会の写真 など

2. 歯学祭の同時開催

平成21年10月17日(土)、18日(日)に恒例の歯学祭が行われます。

講演会、歯科相談、茶会、模擬店など例年以上の盛り上がりが見込まれます。

同窓生には思い出の診療室も見学できます。

3. 今も若いよ 気持ちはね：今年のクラス会は新潟でよろうぜ

会場：クラス幹事さん一任(新潟市近郊でお願いします)

日時：平成21年10月17日(土)または18日(日)

多くの卒業期、特に卒業して区切りの年となる、9期生(卒業30周年)、14期生(卒業25周年)、19期生(卒業20周年)、29期生(卒業10周年)の皆様は記念クラス会開催と「ホームカミングデー」への参加をお願いします。

歯学部同窓会では60周年記念事業とホームカミングデーに関する上記の案内を、今年の3月(第1報)と6月(第2報)に会員に配送しました。また、6月13日(土)に開催されたクラス代議員会議の場においても、クラス会の開催とホームカミングデーへの参加を要請しました。6、7、11、





14、23の各期はホームカミングデーに合わせて新潟でクラス会を行う予定であり、検討中の卒業期もあるとの情報が入っています。クラス会の期日や場所を変更して下さった卒業期もあり、ご協力を感謝致します。

最後に、ホームカミングデーに引き続き、午後の記念事業（式典、講演会、祝賀会）に参加する

手続きを案内します（7月31日までの情報）。ホームカミングデー会場からANAクラウンプラザホテル新潟までは、送迎バスが運行されます。新潟大学同窓生は、記念式典（入場者制限の可能性あり）、記念講演会、祝賀会に参加できます。参加希望者は参加申込書に必要事項を記入し、記念事業実行委員会事務局まで申し込んで下さい〔平成21年9月10日(木)締切り〕。



学部内委員会

平成21年4月1日予定

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
総務委員会	前田 健康	歯学部長		総括
	齊藤 力	副病院長		病院（歯系）
	興地 隆史	副学部長		学部運営
	宮崎 秀夫	副学部長		環境・研究担当
	林 孝文	副学部長		渉外
	鈴木 昭	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
	大内 章嗣	学部長補佐		
学務委員会	小野 和宏	学務委員会委員長	全学教育委員会	総括
	齋藤 功	教務委員長		教務
	朔 敬	入試委員会委員長	入試実施委	入試
	山村 健介	学生支援委員会委員長		学生支援
	藤井 規孝	臨床実習委員会委員長		臨床実習
	鈴木 昭	口腔生命福祉学科学科長		口腔生命福祉学科
教務委員会	齋藤 功	教務委員会委員長		総括
	渡邊 孝一			
	高橋 英樹			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	ステガロ・ロクサーナ			教育課程（口腔生命福祉学科系）
	高木 律男			◎共用試験（CBT）
	藤井 規孝			◎共用試験（OSCE）
	小野 和宏	オブザーバー		
教育課程委員会	齋藤 功			
	小野 和宏			
	高木 律男			
臨床実習実施委員会	藤井 規孝	委員長		
	魚島 勝美	オブザーバー		
	八巻 正樹	第40期ヘッドインストラクター		
	児玉 泰光	顎顔面外科診療室		
	泉 直也	口腔再建外科診療室		
	齋藤 美紀子	画像診断・診療室		
	田口 裕哉	義歯（冠・ブリッジ）診療室		
	庭野 和明	歯の診療室		
	伊藤 晴江	歯周病診療室		
	櫻井 直樹	義歯（入れ歯）診療室		
	中島 貴子	総合診療部		
	田中 裕	歯科麻酔科		
	廣富 敏伸	予防歯科診療室		
	梶井 友佳	加齢歯科診療室		
	三富 智恵	小児歯科診療室		
	八巻 正樹	矯正歯科診療室		
	山田 秀子	総合診療室看護師		
	丸山 智	口腔病理検査室		
	福島 正義	口腔生命福祉学科		
	石川 裕子	口腔生命福祉学科		
共用試験委員会（CBT）	高木 律男			必要な都度委員を指名
共用試験委員会（OSCE）	藤井 規孝			必要な都度委員を指名
学生支援委員会	山村 健介	学生支援委員会委員長		総括
	富塚 健			歯学科
	依田 浩子			歯学科
	島田 靖子			歯学科
	隅田 好美			口腔生命福祉学科
	井上 誠		学生相談室相談員、学生相談連絡会議	歯学部
学生相談員	程 瑠		学生相談室相談員、学生相談連絡会議	研究科
	山村 健介			全学の学生相談室相談員、学生相談連絡会議は、井上教授、程准教授
	依田 浩子			

委員会名	氏名	職名	対応する全学委員会	備考
入試実施委員会	朔 敬	入試委員会委員長	入試委・入試実施委	総括
	福島 正義	前入試委員会委員長		補佐
	井上 誠			
	大内 章嗣		(オブザーバー)	
研究科学務委員会	齋藤 功			総括
	葭原 明弘			教務
	井上 誠			学生支援
施設環境整備委員会	宮崎 秀夫	副学部長		総括
	織田 公光		施設整備専門委・環境整備委	◎
	吉江 弘正		総合博物館検討専門委	
	大島 勇人		動物実験倫理委員会	
	織田 公光		遺伝子組み換え実験安全委	
	福島 正義		口腔生命福祉学科 (施設担当)	
共通施設専門委員会	宮崎 秀夫	副学部長		
情報セキュリティ管理専門委員会	小林 博		総合情報処理センター運営委	総括
	鈴木 一郎			IT一般
	西山 秀昌			
	渡邊 孝一			
図書館委員会	林 孝文	副学部長		
	富沢 恵美子		医歯学図書館長	
	吉江 弘正		附属図書館委員会	
	八木 稔		附属図書館委員会	
国際交流委員会	林 孝文	副学部長		
	魚島 勝美		国際交流委員会専門委	
	星野 悦郎		国際交流委員会専門委、短期留学プログラム実施委	
	ステガロク・ロクサーナ			
	泉 健次			
広報委員会	林 孝文	副学部長	歯学部ニュース専門委	総括
	大島 勇人		研究科広報委 web 担当、学部広報 web 専門委	◎
	鈴木 一郎		研究科広報委 web 担当、学部広報 web 専門委	◎
	五十嵐 敦子		広報委員会 (学部)	◎
	飯田 明彦		広報委員会 (研究科)	◎
	黒川 孝一		口腔生命福祉学科	
	吉江 弘正		公開講座実施委員会	◎
研究科広報委員会 (Web担当)	大島 勇人			◎
	鈴木 一郎			
歯学部広報委員会 Web 専門委員会	大島 勇人			◎
	鈴木 一郎			
	黒川 孝一			
歯学部ニュース専門委員会	林 孝文			他の委員は准講師、助教層からローテーションで選出
広報専門委員会	五十嵐 敦子		学部	
	飯田 明彦		研究科	
歯学部公開講座委員会	吉江 弘正		公開講座実施委員会	
プロジェクト研究委員会	宮崎 秀夫	副学部長		
	山崎 和久			
	川瀬 知之			
	泉 健次			
倫理委員会	星野 悦郎	委員長		
	前田 健康	学部長		
	齊藤 力	副病院長		
	織田 公光			任期 20.4.1~22.3.31
	吉江 弘正			任期 20.4.1~22.3.31
	高木 律男			任期 20.4.1~22.3.31
	南 眞二	学識経験者 法学部		任期 21.4.1~23.3.31

臨床実習実施委員会以外で任期の記載のない委員会委員の任期は、平成21年4月1日から平成23年3月31日まで
◎は下部組織を立ち上げる必要のある委員

教 職 員 異 動

学 部

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21.4.1	秋 葉 陽 介	生体歯科補綴学分野・助教	
採用	21.4.1	矢 作 理 花	摂食・嚥下リハビリテーション学分野・特任助教	
採用	21.4.1	山 崎 学	口腔病理学分野・研究支援者	
昇任	21.4.1	山 村 健 介	口腔生理学分野・教授	口腔生理学分野・准教授
昇任	21.4.1	吉 羽 永 子	医歯学総合病院・講師	う蝕学分野・助教
昇任	21.4.1	永 田 昌 毅	医歯学総合病院・講師	顎顔面口腔外科学分野・助教
配置換	21.4.1	池 田 順 行	顎顔面口腔外科学分野・助教	医歯学総合病院・助教
採用	21.5.1	池 真樹子	顎顔面放射線学分野・助教	
採用	21.7.1	山 崎 学	口腔病理学分野・助教	口腔病理学分野・研究支援者
採用	21.7.1	重 谷 佳 見	う蝕学分野・助教	医歯学総合病院・医員
採用	21.7.1	坂 井 幸 子	小児歯科学分野・助教	医歯学総合病院・医員
採用	21.7.1	辻 村 恭 憲	摂食・嚥下リハビリテーション学分野・助教	
採用	21.7.1	倉 田 行 伸	歯科侵襲管理学分野・助教	医歯学総合病院・医員
採用	21.8.1	堀 一 浩	摂食・嚥下リハビリテーション学分野・准教授	

【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	21.4.1	目 黒 栄 光	歯学部事務室総務係長	自然科学系総務課
採用	21.4.1	永 井 美 芽	歯周診断・再建学分野・技術補佐員	
配置換	21.4.1	塚 野 國 和	歯学部事務室学務係長	医歯学系学務課総務第三係長
採用	21.5.1	会 田 尚 子	口腔生理学分野・産学官連携技術者	
採用	21.6.1	宮 澤 友 美	硬組織形態学分野・事務補佐員	

病 院

【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	21.4.1	池 田 順 行	医歯学系助教	口腔外科助教
採用	21.4.1	加 来 賢	歯の診療科助教	ノースカロライナ大学
昇任	21.4.1	藤 井 規 孝	歯科総合診療部教授	歯科総合診療部講師
昇任	21.4.1	吉 羽 永 子	歯の診療科講師	医歯学系助教
採用	21.4.1	小 松 康 高	噛み合わせ診療科助教	噛み合わせ診療科医員

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 4. 1	昆 はるか	噛み合わせ診療科助教	噛み合わせ診療科医員
採用	21. 4. 1	新 美 奏 恵	地域保健医療推進部特任助教	噛み合わせ診療科医員
昇任	21. 4. 1	田 中 裕	□腔外科講師	□腔外科助教
昇任	21. 4. 1	永 田 昌 毅	□腔外科講師	医歯学系助教
採用	21. 4. 1	庭 野 将 広	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	小 林 孝 憲	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	小 山 貴 寛	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	高 山 裕 司	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	加 藤 健 介	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	船 山 昭 典	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	菅 井 登志子	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	長谷部 大 地	□腔外科医員	新規
採用	21. 4. 1	倉 田 行 伸	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	金 丸 祥 平	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	新 國 農	□腔外科医員	継続
採用	21. 4. 1	船 山 さおり	□腔保健科医員	継続
採用	21. 4. 1	松 本 紗耶香	□腔保健科医員	継続
採用	21. 4. 1	奥 村 暢 旦	歯の診療科医員	新規
採用	21. 4. 1	川 岸 恵理子	歯の診療科医員	新規
採用	21. 4. 1	重 谷 佳 見	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	飯 塚 直 之	歯の診療科医員	新規
採用	21. 4. 1	鞍 立 桃 子	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	坂 井 幸 子	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	飯 澤 二葉子	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	沼 奈津子	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	川 崎 勝 盛	歯の診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	中曾根 直 弘	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	奥 井 桂 子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	金 城 篤 史	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	甲 斐 朝 子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	小 栗 由 充	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	中 川 麻 里	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	越 知 佳奈子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	渡 辺 厚	噛み合わせ診療科医員	新規
採用	21. 4. 1	福 嶋 牧 子	噛み合わせ診療科医員	継続
採用	21. 4. 1	平 山 実 里	歯科総合診療部医員	継続
採用	21. 4. 1	下 条 智 子	歯科総合診療部医員	継続
採用	21. 4. 1	嵐 山 貴 徳	インプラント治療部医員	継続
採用	21. 4. 1	山 田 一 穂	インプラント治療部医員	継続
採用	21. 4. 1	荒 澤 恵	インプラント治療部医員	継続

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
採用	21. 4. 1	松川 理美	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	大貫 尚志	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	竹内 玄太郎	□腔外科レジデント	新規
採用	21. 4. 1	塚田 博子	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	長谷川 麻衣子	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	塙 健志	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	吉川 博之	□腔外科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	山本 真也	□腔保健科レジデント	新規
採用	21. 4. 1	深井 仁美	歯の診療科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	大倉 直人	歯の診療科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	二瓶 亜津子	噛み合わせ診療科レジデント	継続
採用	21. 4. 1	佐藤 友有子	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	21. 4. 1	新美 完	歯科総合診療部レジデント	継続
採用	21. 4. 1	安達 大雅	摂食・嚥下機能回復部レジデント	継続
採用	21. 4. 1	崎谷 仁重	顎関節治療部レジデント	継続
採用	21. 4. 1	高嶋 真樹子	顎関節治療部レジデント	継続
育児休業復帰	21. 4. 5	高野 尚子	□腔保健科医員	継続
退職	21. 5. 31	高山 裕司	新潟労災病院	□腔外科医員
退職	21. 5. 31	松川 理美	沼田神経外科循環器科病院	□腔外科レジデント
採用	21. 6. 1	小玉 直樹	□腔外科医員	新規
採用	21. 6. 1	堀井 信哉	□腔外科レジデント	新規
昇任	21. 6. 1	石崎 裕子	歯科総合診療部講師	歯科総合診療部助教
退職	21. 6. 30	倉田 行伸	医歯学系助教	□腔外科医員
退職	21. 6. 30	坂井 幸子	医歯学系助教	歯の診療科医員
退職	21. 6. 30	重谷 佳見	医歯学系助教	歯の診療科医員

【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
所属換	21. 4. 1	澁澤 幸子	看護部東3階病棟	看護部内科外来
所属換	21. 4. 1	根津 千賀子	看護部歯科外来	看護部西6階病棟
採用	21. 4. 1	稲川 さゆり	看護部東3階病棟	浜松医科大学
採用	21. 4. 1	五十嵐 生美	看護部東3階病棟	新規
採用	21. 4. 1	齋藤 みゆき	看護部東3階病棟	新規
採用	21. 4. 1	佐藤 菜美	看護部東3階病棟	新規
採用	21. 4. 1	鈴木 雅代	看護部東3階病棟	新規
採用	21. 4. 1	並木 結花	看護部東3階病棟	新規
採用	21. 4. 1	星野 友里奈	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	21. 4. 1	原 さゆり	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
採用	21. 4. 1	安齋 さや香	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
退職	21. 4. 30	原 さゆり	無し	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士
採用	21. 6. 1	中 田 悠	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士	新規
育児休業	21. 6. 27	小 池 恭 子		看護部東3階病棟
所属換	21. 7. 1	相 馬 裕 子	看護部救急部・集中治療部	看護部東3階病棟
育児休業	21. 7. 11	黒 木 折 江		看護部東3階病棟
育児休業	21. 8. 19	後 藤 理 恵		看護部東3階病棟
退職	21. 8. 31	長谷川 亜 矢	無し	診療支援部歯科衛生部門歯科衛生士
所属換	21. 9. 1	大 矢 舞	看護部東3階病棟	看護部西6階病棟
所属換	21. 9. 1	田 村 真 弓	看護部東3階病棟	看護部血液浄化療法部
所属換	21. 9. 1	坂 本 彩 子	看護部西10階病棟	看護部東3階病棟
所属換	21. 9. 1	畠 山 良 子	看護部救急部・集中治療部	看護部東3階病棟

【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
昇任	21. 4. 1	渡 辺 学	学術情報部情報企画課長	経営企画課副課長
配置換	21. 4. 1	西 川 岩 雄	総務課長	医事課長
採用	21. 4. 1	藤 江 進	経営企画課長	東京大学医学部附属病院経営戦略課主査
採用	21. 4. 1	坂 本 泰 敏	医事課長	東京大学医学部附属病院医事課専門員
配置換	21. 4. 1	齋 藤 正 志	総務課副課長	総務部総務課副課長
昇任	21. 4. 1	高 杉 浩 文	経営企画課副課長	財務部財務企画課総務係長
昇任	21. 4. 1	丸 山 浩 一	経営企画課医療情報係長	経営企画課主任
配置換	21. 4. 1	山 本 伸	管理運営課管理係長	管理運営課用度係長
配置換	21. 4. 1	宮 路 真 一	管理運営課運営調達係長	管理運営課契約係長
配置換	21. 4. 1	小 林 江 里	管理運営課臨床研究支援係長	管理運営課経理係長
昇任	21. 4. 1	乙 川 孝 夫	医事課医事総務係長	自然科学系総務課主任
配置換	21. 8. 1	小 林 江 里	総務部企画課評価総括係長	管理運営課臨床研究支援係長
配置換	21. 8. 1	佐 藤 栄 作	管理運営課臨床研究支援係長	総務部人事課人件費・給与計算係長

編集後記

「教員の視点から作られていた読んでもつまらない歯学部ニュースから、読者の大部分を占める学生や保護者へ向けた内容への転換を！」という神のお告げの中、無事にリニューアルを果たすことができたのか少々心配ではありますが、編集委員の皆様のおかげでスムーズに編集作業を終わらせることができました。

ご寄稿くださった皆様にもこの場をお借りして御礼申し上げます。

今号だけは、フリーペーパーのように学生控え室の前に山積みのまま捨てられていかないように祈ります。

今後は裏表紙にもありますように、学生さんの編集委員を大募集しますので、ぜひ歯学部ニュースを自分たちの手で創りたいという学生さんの皆さんが、本当の意味でのリニューアルを果たしてくれることを期待しています。

荒井 良明

編集委員の負担の大きさを想像しながら取り掛かった編集作業でしたが、編集委員長の効率のよい役割分担と的確な指示、そして原稿の遅れを想定して早めに締め切り日を設定したにも関わらず、迅速に対応していただいた執筆者の方々のおかげで気持ちよく職務を終えることが出来ました。「入学者のことば」「臨床実習を経験して」では、将来の夢に向かって希望で満ちあふれている様子が伝わってきて、刺激を受けました。

竹中 彰治

今回、(上品な)“おやしらず”が裏? テーマでした。ご存知ない方が今はもう多くなってしまいましたが、“おやしらず”とはかつて歯学部存在していた学内情報誌で、寄稿しておられる先生方の別の一面が垣間みれたり、上の学年の様子に進級の不安や安心が生じたり……。 “歯学部ニュース”が学生さん発信でそんな情報雑誌にもなったらいいなと思います。

ご多忙中にもかかわらずご寄稿くださった皆様にこの場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。

金田 恒

歯学部ニュース

平成21年度第1号（通算115号）

発行者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 荒井良明

編集委員 森田修一、竹中彰治、
金田恒、田中礼

印刷所 (株)プライムステーション



学生編集スタッフ大募集中!!

歯学部広報委員会では、歯学部ニュースの充実をさらに図っていくため、編集スタッフを募集しています！

歯学部のこんな姿を伝えたい、あんな企画をやってみたいという学生のみなさんを大募集中です。

一緒に歯学部ニュースをつかって、歯学部を盛り上げてみませんか？

【募集要項】

編集スタッフ募集に応募したい学生は歯学部広報委員会まで。

歯学部ニュースBack Number : <http://www.dent.niigata-u.ac.jp/news.html/>
新潟大学歯学部ホームページ : <http://www.dent.niigata-u.ac.jp/index.html/>

平成21年度第1号【No.115】編集・発行／新潟大学歯学部広報委員会